

## 緑のレプリカ Camisetas Verdes

### 第1回

#### ★穰治

外国人が乗ってこなければいいのに、とビクビクしていたら、乗ってきてしまった。鮮やかな緑のシャツを着た、体の大きな白人男性だった。メモ用紙に書かれた汚いアルファベットを見せ、英語で何か言っているが、ぼくにはその汚い字が読み取れないし英語も聞き取れない。顔が赤らんでいるのは、すでに一杯ひっかけてきているからだろう。

「Hotel?」と聞いてみる。

Oh, hotel, yes, yesと言っているから、「Which hotel?」と、研修で教わったとおりに尋ねてみる。何か答える。どうやら、Shinagawa princeと言っているらしい。それで、OKと答えて、タクシーを発車させる。

それがぼくが初めて乗せた、ワールドカップ観戦客だった。一週間前、ワールドカップを見に世界中から観客が来るので運転手は怖じ気づかないようにと、タクシー会社が対応の研修を行った。そこで覚えておくべき英語のフレーズが書かれたマニュアルが配られた。「どこのホテルですか?」という今のフレーズも、それで覚えたのだ。

そのマニュアルには、こんなことも書いてあった。

「ヨーロッパや南米のフットボールでは、熱烈な男性サポーターは上半身裸になる傾向があります。大会運営側は、各国のサポーターに対し、日本では裸で交通機関に乗ることはマナー違反だということをお知らせしてありますが、中には興奮して裸のまま乗ってくるお客さんもいるかもしれません。そういうお客さんは、興奮の度合いがひどい場合は、乗車拒否も可といたします。」

ぼくがそれを見てまず思ったのは、外国では裸で交通機関に乗ることはマナー違反じゃないのか?ということだった。それから、裸で応援するスポーツって、どんなだろうということ。確かに、野球とかフィギュアスケートでは裸で応援する人はあんまりいない。ぼくの知るかぎり、公で人が裸になるのは、お祭りで御輿を担ぐときぐらいだ。

このほろ酔いの男も、本当はシャツを脱ぎたいのかもしれない。そう思ってぼくは用心した。

男は酔いに任せて、英語で延々と話しかけてくる。適当に「Oh yeah」と相づちを打っていたら、男の口調はどんどん熱を帯びていき、何かを激しく力説し始めた。何度も、ロイ・キーンRoy Keaneという言葉の繰り返ししている。ときどき、一人で頭を抱えては嘆かわしそうな声を出し、けれどまた気を取り直して力説する。ついには、歌まで歌い始めた。それがアイルランド国歌だと知ったのは、テレビでアイルランド対カメルーンの試合を見たときだったけれど、それは翌日のことだ。フットボールなんて縁も関心もなかったぼくが、その試合を見たのも、この乗客の熱意がすごかったせいだ。

それがぼくの人生を狂わせていく始まりだった。

## ★Ronald Keane

知らないホテルの前でタクシーを降りたロナルド・キーンRonald Keaneは、本当に日本はどこに行っても英語が通じない、そう聞いてはいたけれど、ここまでひどいとは思わなかった、と一人で首を振り、降りる際に渡された運転手のネームカードを見る。アルファベットで「George Aoyama」と書いてある。日本にもGeorgeなんて、英語の名前があるのか？ 英語は全然しゃべれないのに？ ロナルドは呆れつつ、仕方がないので目的のアイリッシュ・パブまで歩いて行くことにした。その知らない大きなホテルに入り、フロントでアイリッシュ・パブの地図を示す。さすがに大きなホテルは英語が通じる。

幸い、パブはそう遠くなかった。それでも歩いて行ける距離ではないということで、フロントの男が新たにタクシーを捕まえ、運転手に行き先を伝えてくれる。そのタクシーに乗り、パブ「O'Gorman's」に行く。

日本に行ったことのある友だちから、そのパブに行けば必ず誰かアイルランド人に会える、と教わっていた。明日のワールドカップ開幕を控え、すでに日本入りしているアイルランド・サポーターたちは少なくないだろう。

店では、ワールドカップ・ヨーロッパ予選でアイルランドがわれらがホームでオランダを下し、グループ2の2位となってプレーオフ進出を決定的にした、あの歴史的試合をスクリーンに映していた。そう、ポルトガル、オランダの競合する死の組に入りながら、アイルランドは出場をものにしたのだ！

その原動力こそが、マンチェスター・ユナイテッドManchester Unitedの闘将ロイ・キーンだったのに、あのバカ監督のミック・マッカーシーMick McCarthyは、サイパンでの直前キャンプ中、自分を批判するキーノKeanoをメンバーから外して帰国させやがった！ キーノなしで、どうやって闘えというんだ？

不安と期待で一時も落ち着けないロナルドは、急ピッチでスタウトstoutをあおった。アイルランド人はたくさんいたが、キーノの話でつかみ合いになるのは嫌だったから、一人で飲んだ。あの事件のあと、キーノを糾弾する声のほうで圧倒的だったのである。

気がついたら、隣で一人で飲んでいる男に、またバカ監督の批判をぶちまけていた。男はアイルランド人ではなく、日本人らしかった。だから気が緩んだのだろう。男は、黙ってうなずきもせずにロナルドの話を聞いていた。英語がわかっているのかわかっていないのか、ロナルドにはわからなかったが、かまわない。

俺はね、キーノと心中するつもりで、全財産つぎ込んで、ここに来たんだよ。幸い、妻も子もないからね、捨てるのは仕事だけで済んだ。ははは。電気工事の仕事だから、まあいつだって仕事には復帰できるんだ。もっとも、暇で金にならない仕事だけだね。ははは。俺も同じキーンだから、キーノが他人に思えないんだ。この世の怒りがフットボールしているようなキーノがいれば、アイルランドは史上最高のベスト4だって狙える。俺たちの姿を世界に見せてほしいんだよ。俺たちはここにいるぞって、見てるやつらの胸に強烈に刻み込んでほしかったんだよ。だから、キーノがチームを引っ張って躍進したら、俺の運もこれから上向いてくるって信じてたんだ。そうしたら、開幕する前にキーノは脱落しちゃった！ じゃあ俺の運はどうなるんだ？ 俺も運が上向くどころか、すでに人生脱落ってことか！

## ★キチ

まだ開幕もしていないのに、エールaleを飲み過ぎてメソメソしているその若禿げの30代のアイルランド男に、俺は唯一しゃべれる英語を言ってやった。

「Boys, be ambitious. (少年よ、大志を抱け)」

中学校の英語で教わって覚えている、数少ないフレーズだ。明治時代だかのアメリカ人が日本の若者に言った、有名な言葉らしい。

若禿げは、俺の顔をまじまじと見ると、俺の肩を叩いたり握手をしたりしながら、さらに泣き崩れた。

言ってる言葉はまるっきりわからなかったが、延々とエールを奢ってくれるので、俺は黙って聞いていた。とにかく、こいつがフットボールに人生賭けていることだけは伝わった。そしてそのことが俺の心のど真ん中を電撃のように貫いた。

フットボールに人生を賭ける！ こいつにとって、人生を賭けるだけの価値がフットボールにはある！

そうだ、フットボールだ！

俺は子どものころの自分を突然、取り返した。毎日フットボールに明け暮れ、フットボールと一体化していた自分を。

それは忘れてたくて実際に忘れてしまっていた過去だった。本当はそこに戻りたいのに、絶対に戻れない場所だから。

俺は9歳の時に、親父（おやじ）に連れられてサンパウロから日本にやって来た。親父の親父、つまり俺のおじいちゃんは日本人の移民だった。俺は日系移民3世で、親父が日本にデカセギに来るのに、一緒に連れられてきたのだ。おふくろは親父を見捨ててどこかに消えた。だから、俺を置いていくわけにはいかなかったのだ。

けれど俺は日本語をひと言もしゃべれなかった。日本人の血が半分、流れてるってだけで、自分の中の日本人を意識したこともなかった。俺はブラジル人として、ひたすらフットボールに打ち込む、ブラジルならどこにでもいる子どもだった。

それが、いきなりまったく見知らぬ土地で、言葉もわからないまま現地の小学校に放り込まれたのだ。

しばらくは、時間がたてば慣れるだろうと楽観視していた。その見通しは甘かった。1年間、言葉のわからない俺は誰とも口をきかず、生徒たちも俺はいないかのようにふるまった。授業中はひたすら寝ていた。眠くなくても、寝たふりをし続けた。要するに、俺はいるけどいないのだった。学校には来ているけれど、まわりからは見えない存在なのだ。幽霊みたいなものだ。

1年後に親父は職場を変え、俺は転校したが、次の学校でも同じだった。いじめられたり差別されたりするわけじゃない。たんにいないのだ。存在してないのだ。俺としてはいるつもりでも、客観的に見ればいない。この拷問がどれほど苦しいことか、体験したものじゃないとわからない。俺自身、あのときは、それが大したことじゃないと思おうとしていた。何もしないでただ寝てればいいだけ、楽じゃん、と思っていた。かろうじて先生だけが放課後に週1回の特別授業を開いて、日本語を教えてくれようとした。

けれど、中学に進んだとたん、俺は自分が限界に来ていたことを知った。初めての教室に入り、適当に席に着く。隣に座った男子が話しかけてくる。俺はそいつを、何も言わずにいきなり締め上げ、殴りつけたのだ。

腹が立っていたわけじゃない。俺は自分がここに存在していることを、身をもって示そうとしたのだと思う。言葉でそれができないから、態度で表そうとしたのだ。

俺が図体がでかかった。体の中には怒りが渦巻いているから、目つきも鋭かった。髪の毛は真鍮みたいな色に染めて、短く立てていた。

そんなやばい外見の大男が、話しかけたとたんいきなり殴りつけてきたのだ。俺は激しく恐れられた。それでも寄ってきたのは、不良だけだった。

初めて俺が存在していることを認めてくれた不良連中の仲間に、俺は加わった。日本語はまだたどたどしかったけれど、俺のケンカの強さを恐れて、誰もからかたりしない。その中から気の合う奴も現れて、俺はそいつから日本語を吸収した。中学2年にもなると、俺はもう言葉で不自由しなくなった。

以来、俺はその学校の不良グループの、ケンカの切り札として活躍した。俺が一番強かった。人望のある頭（かしら）のナンバー2として、背後を締めていた。俺は「キチ」と呼ばれた。香坂泰吉（こうさか・やすきち）の「吉」でもあるし、「キチガイ」の「キチ」でもある。最初は「キチガイ・ヤスキチ」と呼ばれた。ケンカになると我を忘れてしまい、誰かが止めるまでボコボコにするからだ。

俺はそのあだ名を気に入っていた。親父の名前にもおじいちゃんの名前にも、「吉」が入っていた。じいちゃんが「吉保（よしやす）」、親父が「祐吉（ゆうきち）」。好運とかラッキー-sortieという意味の文字だ。つまり俺の「キチ」というあだ名は、Sorte louco、狂った運命、凶運という意味でもある。俺にピッタリじゃないか！

その名前を体現するように、俺は暴れ狂った。かろうじて夜間高校に入ったものの、すぐに暴力沙汰で退学になった。仲間もみんな退学になり、俺たちは暴走族を結成して走り回り、ケンカして回った。肉体が与える痛みだけが、俺の生きている証だった。だから俺はケンカをやめなかった。

同じ日々が繰り返され、時間の感覚もなくなっていた。気がついたら俺は逮捕されていた。すでに20歳になっていた。そのケンカは、行き当たりばったりではなく、仕組まれたものだった。うちの仲間内に、いつの間にか、組のものの舎弟が入り込んでいた。そいつが「アニキ」の命を受けて、対抗する組の親衛隊である族を襲撃したのだ。俺は何も知らされていなかった。そこにいたのは族だけでなく、組のものもいた。舎弟はそいつを刃物で刺した。すぐに警察が現れ、俺らは一網打尽にされたのだ。

俺は鉄パイプで何人かをボコっただけだったが、前科がいくらか出てくるので、起訴された。3か月ほど拘置所に留め置かれ、裁判の結果、懲役6か月、執行猶予2年の有罪判決が下された。

問題はその先だった。釈放された俺は、娑婆に出ることもなく、そのまま今度は入国管理局に収容された。俺には日本国籍はない。特別在留許可というビザで、滞在を許されている。それが取り消され、ブラジルに強制送還されることになるだろう、というのだ。

このとき、俺は初めて自分がこの土地に愛着を持っていることに気づいた。俺なんかを受け入れてくれたとは言えず、はみ出し者としてしか生き続けられなかった社会なのに、俺はここにいたかった。俺はここでまだ何もしていなかった。今さらブラジルに戻すぐらいなら最初から連れてくるな、と叫びたかった。この土地で人生の半分を送り、貴重な10代を送った以上、俺はここで何か誇れるものを築き上げたかった。

もう一度だけチャンスをください、と俺は頭を下げた。できない日本語で懸命に、やり直しを誓う文章を書いた。本気だった。

それからさらに半年、入管の「待合室」で過ごした後、俺の在留特別許可は継続されることが決まった。

俺は人生に感謝した。今度こそ、負けないでがんばってみようと思った。まずは金を貯めよう。

けれど、意欲だけではどうにもならない現実と直面する。親父はとうの昔に俺に愛想を尽かし、50万円を渡され、自宅には帰ってくるな、と言われた。外国籍で高校中退、頭は悪い、勉強はしてこなかった、知識はない、日本語も不十分。そんな若造に、仕事なんかあるはずがない。悪い仲間からの誘惑に心が動きそうにもなったが、幸い、親切にしてくれていた入管のおじさんがコンビニのバイトを紹介してくれた。俺がまた元の人生に戻らないかと心配したのだろう。

初めての仕事であり、自分で稼いでいると思うと、しばらくは夢中になれた。俺でも普通にいろいろな仕事ができるんだと感じられて、少し自信も持てた。けれど、半年もたつと、このままでいいのか、俺は何をしたいのか、という疑問が湧いてきて、次第に虚しさを覚え始める。俺がここにいることを誇る何かをするんじゃないじゃなかったのか？ コンビニの仕事をしていて、それは実現できるのか？ そんなわけはない。じゃあ、俺は何をしたいんだ？

いくら考えても、俺は何をしたいのか、自分ではわからなかった。基礎となる勉強を怠ってきた俺に、何かをできるとはどうてい思えなかった。じゃあ、何か職人のようなもの？ 大工？ 強制的にその世界に放り込まれて修業させられたら、やむなくそこでがんばったかもしれない。けれど、自分から飛び込んでいくには、あまりにも遠い世界だった。

そんなわけで、俺は手応えのないまま漫然とコンビニの仕事が続けながら、むしゃくしゃし始めているところだった。のっぺりと平らな日常から逃れたくて、渋谷やポンギのクラブに行ったりバーに顔を出したりした。格好の目立つ俺に声をかけてくる連中はたくさんいたけれど、こいつらとつるんだらまた同じことの繰り返しだと思って、俺は深入りしなかった。

このアイリッシュ・パブに入ったのは初めてだ。黄緑のシャツを着た白人たちがぞろぞろと入っていくのを見て、何かイベントでもあるのかなとつられたのだ。中は同じような連中ばかりで、ときどき、壁のスクリーンに映っているフットボールの試合を見ては、大盛り上がりしている。その黄緑シャツのアイランドとオレンジシャツのオランダの試合は確かに気魄の籠もった一番で、俺も眺めているうちに引き込まれた。オレンジシャツが圧倒的に攻めていて、黄緑シャツは守備陣に退場者まで出したのに、必死で守り続け、ワンチャンスをもものにして先制。かさにかかって攻めるオレンジシャツの実力はすごかったが、黄緑シャツの守備への執念はそれを上回っており、危機をしのぐたびに俺は歓声を上げていた。

それがアイランド人の若禿げの心に響いたのだろう、暑苦しく俺に何かを訴え始めたのだ。そして、明らかに黄緑シャツを統率している大柄でオーラのある選手がアップで映るたびに、感情的になって声を震わせ、泣き始める。しょうもねえバカだな、と俺は思うのに、なぜか一緒になって泣きたいような気持ちになってくる。

フットボールが俺の固くなった心を揺さぶり、柔らかくしたのだ。10年かけて作った殻を、ゆっくりとひび割れさせたのだ。そこから呼吸をし始めた心が、このアイランド人の若禿げの丸出しの心に、反応している。

コンビニの仕事をしていた一年間も、日本ではワールドカップ開催に向けて代表の試合が盛り上がりつつあったが、俺には関係ねえ、とっていた。ブラジル代表の試合は放映もされないし、フットボールなんて俺にはもう遠い過去の世界の話だった。

けれど今、殻から顔をのぞかせた心が、フットボールを呼吸をするように吸い込もうとしている。小さなコートや路上でフットボールをしていた子どものころの気分、コリンチャンスTimãoの熱狂、あのサポーターたちと一緒にあって歓喜や苦しみをもにするあの時間、Corinthianoとしての誇り、フットボールさえあれば嫌なことはすべて忘れられるあのTodo Poderosoの感覚なんかが、一気によみがえる。だから、アイルランドの若禿げの気持ちも、手に取るようにわかった。何を言っているかはわからないのに、そのどうにもならない苦しい気持ち、耐えようと言いつた心、そして秘かに喜びの予感に震える魂が、こいつの中で息をしているのがわかる。

俺はワールドカップを見ようと思った。窒息しかけていた心が、フットボールという空気を必要としている。とにかく、見よう。そうすれば、これから俺がどうしたいのか、自ずと見えてくるだろう。

### ★穰治

またあの緑シャツの外国人を乗せることになろうとは思わなかった。携帯に電話がかかってきて、迎車を頼みたいと言われた。もう自分の勤務時間は終わって社に戻るところだから、と断ったけれど、どうしてもあんたの車がいいとこのアイリッシュが言い張るから、と言われる。まあ日本人の連れがいるなら仕方ないかと思い、指定された恵比寿のアイリッシュ・パブ「O'Gorman's」に出向く。店の中をのぞき込むと、緑のシャツを着た似たようなでかい白人がおおぜい、酔って歌ったりしている。

電話した男は、ちょっと彫りの深い顔立ちの若者だった。アイルランド人たちに劣らず、いいがたいをしている。

「こいつ、知ってるだろ？」と、隣で酔いつぶれて寝ている男を指さす。確かに、あの英語でまくし立てていた男だ。「ポケットにこれが入ってたから、俺が電話した」と、ぼくのネームカードを示す。そしてタクシーの中でも見せられたメモを渡され、「このホテルらしい」と言う。

「読めないんですけど、品川プリンスでいいんですよね？」と確認する。

男は首を振り、「新川ピースShinkawa Peaceって書いてある」と言う。こんな字が読めるのか、さすが英語のできる人は違う、と感心するが、男はアイルランド人の客を担いでぼくの車に乗せると、「じゃ、頼むよ」と言って店に戻ってしまった。

でもあのアイルランド人は、お茶目でもあった。ホテルに到着したので起こすと、びっくりしてから何度もThank youを連発し、別れ際にぼくが「グッド・ラック、アイルランド」と言うと、顔に電気が点いたみたいに笑顔になり、「You, too」と答えてから、思いついたように緑のシャツを脱いで「For you」とぼくに差し出した。

やっぱり裸になるんだ！ とぼくは慌て、「No, no」とシャツを着る真似をした。何しろ、ホテル前の歩道だ。それでも譲らないので「Too big」と言ったら、寂しそうに「OK」と言って着た。

「ほんと参ったよ」と翌日、入社してから一番仲のよい同僚運転手の林田に話すと、「俺なら、シャツ、もらっとくな。それで自分のシャツと交換するんだよ。フットボールじゃ普通のことだよ、ユニフォーム交換」と言う。記念にもらっとくべきだったか、と少し後悔したけど、汗だらけだったし、やっぱりいらないな、と思い直した。

勤務が終わり定刻に上がろうとしたとき、上司に呼び止められ、「林田から聞いたけど、穰治は外国人対応がうまいらしいな」と言われる。「そんなことはないです、英語わかりません」と否定し

たけれど、「言葉なんかどうでもいいんだ。いくつかワールドカップがらみでチャーターの運転手の依頼が来てるから、穰治、頼むよ。また声かけるから、そのつもりでいてくれ」

チャーターってことは、ガイドが付いてるんだろう、それなら楽かも。そう思い、「了解です」と返事しておいた。

コンビニで夕飯の弁当を買ったらそそくさと家に帰り、録画しておいた開幕戦のフランス対セネガルを見る。フランスは前回優勝チームなのに、強いとは感じられなかった。セネガルの選手のスピードにびっくりした。フットボールなんてまともに見たことのなかったぼくは、これはセネガル優勝じゃないの、と思った。

この試合をどう見たらいいのか自信がなかったので、ネットでいろいろ調べた。そこで見つけた、フットボール好きの吉見大輔という作家のブログが興味深かった。「蹴ってしまえばよかったのに日記」というタイトルだ。

2002年5月31日（金曜） 晴れ

ワールドカップが開幕。フランスーセネガル戦は、異様なムードで始まった。普段、liga españolaやアルゼンチンのprimera divisiónや欧州チャンピオンズリーグを見ているときにあるような、キックオフとともに期待がはじける雰囲気はスタジアムにはなく、開会式の余韻を引きずって、高いテンションの出来事が終わった直後の興奮の冷めない状態のようなざわついたムードのまま、試合に突入してしまった。メリハリのあるべき声援も、ざわめきに掻き消されてしまう。

そのとりとめのない環境に合わせるかのように、フランスはぼんやりしていた。ジダンがいないことを差し引いても、動きは悪かった。セネガルが複数でしつこいチェックを繰り返すので、フランスは容易に攻撃を組み立てられない。そのチェックの厳しさがわかっていても、動きはどこか緩慢で、ボールを奪われてしまう。

フランスは疲れているのではないか？ ジダンの怪我也、直接的には、開幕直前に韓国と親善試合をしたとき、本番前だというのに全力でタックルしてきた金南一（キム・ナミル Nam-il Kim）に削られたせいだが、根本的な原因は疲労の蓄積だという。レアル・マドリードで負られない試合を繰り返したあげく、ワールドカップ2週間前には、チャンピオンズ・リーグ決勝でレバークーゼン相手にとんでもない試合を戦った。フランスの他の主力メンバーは、アーセナル所属が多い。アーセナルも国内2冠を達成するために、高いテンションの維持を強いられていたはずだ。それから休む間もなく、ワールドカップに突入した。達成感とともに長いシーズンの緊張を解き、心地よい疲労に身を任せただけなのに、すぐに別種の緊張を維持し直すのは、かなり難しい。

実際、今大会はいつになく、怪我で出場を断念したスターが続出した。欧州フットボールの日程は選手が耐えうる限界を超えており、蓄積された疲労がタレントたちを壊していく。いつも怪我をしていたロナウドはその象徴的な例だが、このワールドカップもさらに怪我人を増やしていくのではないかと不安である。

セネガルがそれまでのアフリカのチームのイメージを変える、魅力的で新しいタイプであることは疑いない。そしてかれらにとって完璧なフットボールをした。対するフランスは、ディフェンスの衰えを隠せなかった。それなりのチャンスは作ったが、決めることはできなかった。決定的なヘッドをゴールに平行に撃ってしまったアンリは、「いかにもアンリ」（アンリを決して信

用しない友人の弁) だった。それでも、フランスが万全の調子で臨んでいれば、試合の緊迫感はずっと増しただろう。好ゲームであったにもかかわらず、少し退屈だったのは、フランスが疲れて弛緩していたせいではないか。

ぼくが本格的にのめり込んだのは、次の日のアイルランド対カメルーン戦だ。この日は夜勤だったから、昼間のこの試合は生中継で見ることができた。背筋がゾクッと来たのは、まだキックオフ前、アイルランドのゴール裏に陣取った鮮やかなライトグリーンシャツの白人たちが、応援のフレーズを唱え、チャントを合唱し、国歌を合唱しているその分厚い声とただならぬテンションと迫力に触れたときだった。ぼくはテレビで見ているだけなのに、その臨場感ある声援に囲まれ、呑み込まれ、まるでスタジアムに立っているような気がした。

試合はカメルーンのペースで始まり、そのしなやかで目のくらむトリッキーなプレーとスピードには度肝を抜かれた。前半、日本でもプレーしていたというエムボマが先制するが、目立っていたのはエトーという若手だ。日本ではどうやらカメルーンのほうが人気があるらしい。大分県のものすごい田舎の山の中でキャンプを張って、土地のおばあちゃんおじいちゃんを虜にしたのだそう。

けれど、後半に入ると試合は変わった。アイルランドが次第に攻勢を強め、しつこくしつこく攻撃してくる。まさに「しつこい」という言葉がぴったりだった。撥ね返されても、かわされても、反撃を受けてピンチになっても、手を緩めずに必死で走って攻撃する。その勢いは、いつまでたっても衰えない。逆にカメルーンはだんだん疲れてきて、動きが緩慢になった。そして後半の中ほど、とうとうアイルランドが追いつく。ゴール前にぽかっと空いたスペースにこぼれたボールを、ホランドという選手が地を這う弾道でシュート！ 芝生にシュートの跡が付きそうなキックだった。

このときのアイルランド応援団の歓喜と来たら！ どうだ、これがアイルランド魂だと言わんばかりに、誇りに満ちた顔を輝かせて乱舞している。何だかぼくもじーんと来て涙ぐみながら、テレビの前で一人、よっしゃ！よっしゃ！と叫んでいた。まるで、タクシーの客のあのアイルランド人がぼくに乗り移ったみたいに。

キーン命のあいつは今ごろ、このゴール裏の中において、最高の喜びを爆発させていることだろう。そう思うと、ここにいるぼくとも魂がつながっている気さえした。

試合はそのまま引き分けに終わったけれど、大きなカタルシスがぼくの中にあっただ。アイルランドはぼくの魂をわしづかみにした。何というか、この試合を見ている間、ぼくは自分の中に血が流れているのを初めて感じた。それまでのぼくは、自動操縦のロボットみたいだった。まわりと同じように行動し、考え、上司の言うとおりに働く。特にそれで問題はなかったけれど、今、この体の中を暴れ回る感情の塊を知ってしまうと、そのロボットの中にはぼくが存在していなかったな、と感じる。

つまりぼくはフットボールによって初めて目覚めたのだ。

世界が違って感じられた。窓の光も、空気の香りも、小鳥の鳴き声も、通りの車の音も、ビル工事の音さえも、つややかで色気に満ちている。

これはぼく自身の喜びだ。なぜなら、ぼくはアイルランドの力によってフットボールを知り、自分を目覚めさせたのだから。これが日本代表の試合だったら、たんにまわりと一緒に盛り上がっているだけで終わったかもしれない。

こんな気分にいる人が、日本のフットボールファンにはたくさんいることを、これから知ることになる。



ぼくが愛読しているブログ「蹴ってしまえばよかったのに日記」の吉見大輔もその一人だった。

2002年6月2日（日曜） 快晴

アルゼンチン対ナイジェリア戦を見に、鹿島スタジアムへ行く。

この戦慄と飛翔感をすぐに言語化するのは無理である。中心が11人の間を絶え間なく移動しつつ、休むことなく空間のバランスを保ち続ける。脳から筋肉に至るまで、11人が11種類の個人であり、同時に1つの有機体であった。自分とは切り離されている他人と、このような意思疎通・連携がなし得ることが、驚きだった。このアルゼンチン選抜チームは間違いなく、私が今までフットボールを見てきたうちで、最も完璧で最も洗練され、最も攻撃的で最も強いチームだと断言できる。

そんなチームでも優勝できるとは限らないが、もし優勝したら、フットボールは新しい時代に入るだろう。この大会は、結局はディフェンスが最も堅いチームが勝つような気がするが、その予感をアルゼンチンの変幻自在な攻撃フットボールが打ち砕いてくれる気もするのだ。このスリリング極まりないフットボールを見逃しては人生の損失である。

吉見大輔はアルゼンチンによってフットボールに目覚めたらしい。ぼくは本屋で次のようなエッセイも立ち読みした。

どこの絵に属しているか？

「De qué país sos? (どこの国から来た?)」

「De Japón. (日本からだよ)」

「Taka, verdad? (高原だな?)」

「No, no soy Taka. (違うよ、俺は高原じゃない)」

アルゼンチンの街角やスタジアムでフットボールの話の向けると、まず右のような会話から始まり、続いて次の、アルゼンチンならではの質問を必ず浴びせられる。

「De qué cuadro sos?」

直訳すると、「どこの絵に属しているのか?」となるものだから、私はいったい何を訊かれているのかわからず、しばらくは悩まされた。結局、これは「どこのクラブのファンなのか?」という意味なのだが、冒頭の質問と比べてもわかるように、本来は「出身」「所属」を尋ねる疑問文である。つまり、アルゼンチンでどこかのフットボールクラブのサポーターであることは、単にサポートするクラブチームを選ぶというより、出生のように、いやおうなく決められるその個人の属性みたいなものなのである。だから、あらゆる人がどこかのクラブに「属して」いなくてはならない。アルゼンチンではフットボールは宗教のようなものだと言われているが、私には民族のように見える。ちなみに私は、リーベルに「属して」いる（帰化）。

私がアルゼンチンを訪ねたのは今年（2002年）の3月だが、その時点ではワールドカップの盛り上がりはほとんど見られなかった。みんなアルゼンチン・リーグの行方に夢中で、まだ三か月も先のワールドカップどころではないのである。折しも、スーパー・クラシコsuper clásico、ボカ・ジュニオールスboca Juniors対リーベル・プレートRiver Plateを翌週に控え、世間はその予想で持ちきりだった。スポーツ紙でも両チームのエース、オルテガAriel Oertega（リーベル）とリケルメJuan Román Riquelme（ボカ）のどちらが優れているか

の投票を実施して、毎日途中経過を載せていた（結果はオルテガの勝ち）。そして、わがリーベルは10数年ぶりにボカの本拠地、ボンボネーラLa Bomboneraで勝利を取めた！

ワールドカップとは、あくまでもこの延長上に出現する巨大な祭典である。常日ごろからリーグでの民族の戦いに深くコミットしてきた者たちが、四年ごとにその熱狂をさらに大きな外部へ向けて発する場なのだ。クラブのリーグが盛り上がりずして、ワールドカップでの真のカタルシスはありえない。妙な言い方だが、アルゼンチン人たちはワールドカップを生き、堪能し尽くすために、普段から地道な努力を怠っていないのである。

日本もJリーグができ、ワールドカップ出場も果たし、海外へ出る選手のおかげでヨーロッパ各クラブの最高レベルのフットボールを見る機会も増え、この十年で観衆のフットボールを見る目はだいぶ肥えてきたと思うが、Jリーグを見るときの真剣さ、厳しさはまだまだ足りないと感じる。Jリーグと比較して代表の試合の人气が圧倒的に高いという現状は、わからなくはないが、どこか安易なものを含んでいる。

日本にいてフットボールを見ている以上、私がフットボールに対してできることは、日本のフットボールを強くする環境の一部になることのみ。いくらJリーグの試合が緩くてスピードや厳しさに欠けるとしても、私は日本のフットボールの現状に責任を負っている。だから海外のクラブの試合だけでなく、できるだけJリーグも見ているし、「属す」とまではいかないけれど肩入れしているチームはあるし、ワールドカップもその延長で見るつもりだ。

ただし、この「属す」という感覚は民族同様、フィクションでもある。なぜなら、最終的には別のクラブチームを選び直すという選択肢もあるからだ。私がブエノスアイレスを訪ねたころ、あちらのフリーガンであるバラ・ブラーバが荒れて死者を出すという事件が続発し、リーグの中止まで検討された。そのような事態に対し、多くのまっとうなアルゼンチン人は、たかがフットボールでそんな死に方はしたくない、だから観戦は止める、と怒る。「属する」ことのフィクションを本気で楽しめるのがファンであり、ホーム、アウェイという感覚もそこから派生する。いやしくもフットボールを好きなのであれば、クラブチームに対して中立ではありえず、どこかに属すが、それはあくまでも自分の意志と責任によるもので、だからアウェイではよるべなさ、孤独を噛みしめながらスタンドに身をさらしてはならないし、ホームではチームが負けたり下らない試合で勝ったりすれば、やり場のない苦しみを味わいつつ、選手を突き放す（見放すのではない）という別の孤独に身を置かなくてはならない。

日本はワールドカップ出場たった2回目にして、分厚い声援でくるまれたホームのみで戦うという特権的な体験をすることになる。その中で私は、一体感に酔うのではなく、自ら「属する」ことの責任と孤独を満喫したいと思う。

## 緑のシャツ Camisetas Verdes

### 第2回

#### ★典子

早朝に拾ったタクシーの若い運転手は、やたらと昨日のアイルランド戦について熱く語っていた。さらに、どうしてアイルランドに肩入れし始めたのか、お客さんとして乗せたアイルランド人のことまで話し出す始末。さんざん語ったあとで、あ、まさかお客さん、アイルランド嫌いなんてことありませんよね、もしそうだったらすみません、気分害したかもしれませんね、と恐縮している。

鬱陶しくはあったけれど、アイルランドなら不快ではなかった。日本代表の話をされることに比べたら。今はどこへ行ってもその話題ばかりなのだ。

私は「問題ないです」と答えて、今日はこれからそのアイルランド戦が行われた新潟スタジアムに、メキシコの観客を連れていかなければならないのだ、と説明する。

「ナマで試合を見られるんですね、いいなあ」運転手は心底から羨ましそうに言う。

「仕事だから、そんなに試合を楽しんでる余裕なんてあるかどうか」

「これも何かの縁ですね。メキシコの試合、見てみますよ」

運転手はそう言うと、「青山穰治 George Aoyama」と書かれた名刺を渡してきた。メキシコとかでは、また乗ってもらおうと売り込んでくる運転手は多いけど、日本ではちょっと珍しいなと好感を抱いた。私の名刺も欲しいというので、自分のパソコンで「岸上典子 Noriko Kishigami」と印刷したものをあげた。

ホテルには8時に着いた。9時にホテルを出発するのだが、旅行会社は8時半にロビー集合とメキシコ人のお客さんたちに伝えていた。30分も前なんてまずいんじゃないかなと懸念したら、そのとおりになった。

まず、時間通り8時半に現れた人たちが5人。残りの6人は、10分過ぎても現れない。すると、最初に来ていた5人が、なんでこんなに早く来なくちゃならなかったんだ、バカみたいじゃないか、と怒り始め、9時に出発なら9時にここに帰ってくる、と言って、ロビーから出て行ってしまった。

9時になると、ようやく6人はロビーに降りてきたが、今度は、出て行ってしまった5人のうち3人組のおばさん、ClaudiaとLupitaとLolaが現れない。フロントから部屋に電話しても不在だし、どうやら外に出てしまったらしい。ホテルの近くをうろうろと探して、ようやく、コンビニでファッション誌を立ち読みしながら盛り上がっている、濃い緑のメキシコ代表ユニフォーム姿の3人を発見した。

全員が緑のユニフォーム姿で小旗の緑白赤の三色旗を振っている一団は、ただでさえ目立つうえに、早くも盛り上がり始めて騒がしいときている。メキシコ人たちは誰彼かまわず声をかけるし、ちょっと興味を惹く店があると立ち止まるので、私はまるで幼稚園児を引率する先生の気分だった。

初めて乗る新幹線では、たちまちお祭り騒ぎが始まった。車内販売の売り子が通路をカートを押して現れると、珍しそうに一品一品確かめ、ビールやらお酒やらつまみやらを大量に買い込む。さっ

そく乾杯して、あっという間に缶は空いていく。持ち込んでいたテキーラも開ける。ソンプレロをかぶった若手のAlexandroがラジカセを取り出して、ノルテーニョnorteñoを大音量でかける。たちまち大合唱が始まる。

中年男のBetoは用意してきたルチャ・リブレlucha libreのマスクをかぶり、連れてきた十歳ぐらいの娘Susanaにも、子ども用のマスクをかぶるよう、強要する。Susanaは、それは男のものだと言って嫌がっていたが、Betoは無理やりかぶせてしまった。泣き出すかと思ったが、ただふてくされただけだった。Betoは音楽に合わせて歌い、Susanaにも「一緒に歌いなさい」と促す。すると、Susanaがふてくされているわりには真剣に歌い出したのには笑ってしまった。こうしてメキシコ人はメキシコ人としてできあがっていくんだなあ、と、その過程を見るようだった。

酔っ払ったメキシコ人たちは、売り子のお姉さんが通りがかるたびにちょっかいを出し、Alexandroと一緒に写真を撮ってもらい、どうやって売るのがかと尋ね、ぼくに売らせて、とお願いして、困惑する売り子さんをよそに、「ビルとオッツマミ、いかがですかあ」と売り子さんの口真似をしてカートを押して通路を言ったり来たりし、どんちゃん騒ぎに迷惑そうな顔をしている日本のおじさんとおばさんの三人組に「いかがですかあ」と言ってビールを差し出してみせ、さらにはソンプレロも差し出しておばさんにかぶせ、一緒に写真をせがみ、おばさんも苦笑して応じ、baila, bailaと言いながらおばさんの手を取って踊り始めると、おばさんも何だかノリノリになって踊る。

別の席ではClaudia, Lola, Lupitaの三人組が、検札に来た車掌のちょっと爽やかなお兄さんと写真を撮り、彼の制帽を取って頭にかぶり、また写真を撮り、すると他のメキシコ人客もその帽子をかぶって写真を撮りたがり、制帽は次々とメキシコ人の頭を移動して行って、年配のひょうきんなおじさんChuchoが帽子を立てた人差し指の上で回すと、拍手が起こった。車掌さんは、最初こそ「困ります、返してください」と日本語で言っていたが、そのうち諦めて、微笑みながら見ていた。

そしてとうとう、メキシコ人お決まりのシエリート・リンドCielito Lindoの大合唱が始まり、メキシコ人たちはその車両の客という客と一緒に歌うよう、促して回った。

Ay, ay, ay, ayyy, canta y no llores,  
porque cantando se alegran,  
cielito lindo, los corazones.

乗客の誰もが上気して興奮した表情をしていた。メキシコも日本もあらゆる土地の人が。車掌も売り子さんも、この非日常を受け入れていた。どんなお祭り騒ぎでも、勤務中にこんなハメを外すような真似は決してしない人たちが、メキシコ人のparrandaに巻き込まれてノッている！

メキシコ人の感染力に、私はあきれつつ感心した。ふだん日本人が張っているバリアをいとも簡単に突破してしまった。このままどんどん感染が広がって、日本中にメキシコ人的な感性が植えつけられれば、日本ももっと楽しくなるのに。生きやすくなるのに。

もちろん私も引っ張り出された。「Noriko, canta, canta」とはやしたてられ、「Mucho Corazón」を熱唱した。私も嫌いなほうじゃなかったし。

それからはカラオケ大会みたいになり、メキシコ側が一曲歌ったら今度は日本側と交互に歌われ、日本側でも誰も拒む人はおらず、後で歌を相互に教え合ったりしていた。おかげで、私は客の要望で、宇多田ヒカルやサザンオールスターズや石川さゆりなんかのCDを買いに行くはめになった。

新潟のスタジアム「ビッグスワン」に到着すると、大量の日本人が入り口周辺で「I WANT A TICKET. チケット ゆずってください」などと手書きしたボードを掲げていたのだが、驚いたこと

に、その中に何人かメキシコ人が混じっていた。何となくうちのグループのまとめ役みたいになっている、白髪で物静かでダンディなアルフォンソAlfonsoがその一人に話しかける。

アルフォンソが聞いた話によると、メキシコではチケットが買えなかったけれど、メキシコとクロアチアやエクアドルの試合なんて、満席になるほど日本人が押しかけやしないだろう、だからチケットは余ってるだろうと踏んで、直に来たのだという。でも日本でもチケットは売り切れだとのことで、あちこちで探してみたけどダメで、こうして最後の望みをかけて立っているのだそうだ。でも同じことをしている人がこんなにたくさんいるとは思わなかったし、無理かもしれない、と覚悟はしているようだった。ダフ屋は出ていたけれど、こんなに需要があるのではそうとう吹っかけてくるだろうから、状況は厳しそうで、私は同情した。

それにしても思いきったことをするもんだと、その無謀さにも呆れる。それほどまでフットボールに情熱を持っているのか、スタジアムには入れなくてもこの祭りを楽しめればよいということなのか。メキシコ人たちは、今回のメキシコ代表El Triは予選から冴えなかったから無理だよ、と妙にシラけている者と、いや、アギーレJavier Aguirreが監督になってからは本来のポテンシャルを発揮し始めて上り調子だから、1986年大会のベスト8を上回る成績を残せる、と前のめりな者とに二分されていた。でも、どちらも試合前になれば大盛り上がりしてる。けれど、日本の観客たちにはクロアチア応援のほうが多いらしいことが、あちこちから聞こえてくる会話でうかがえた。クロアチアが新潟でキャンプを張っていたせいだろう。

私たちのグループはバックスタンド側のコーナーあたりの席だったのだが、キックオフの時刻が迫ってきても周囲に空席がある。スタジアムを見回しても、ところどころ、穴が空いたように席が空いている。それどころか、メキシコサポーターが陣取るゴール裏は、1ブロック分がぽっかりと空いているではないか。

またチケット問題が起きているようだ。外でチケットを探している人たちの分ぐらい、ゆうにありそうなのに。

試合はメキシコが優勢にゲームを進め、メキシコのFWブランコCuauthemoc BLANCOを、クロアチアのディフェンダー、ジブコビッチBoris ZIVKOVICが倒して退場、PKとなり、これをブランコが決めて、守り切った。

その日、帰宅してから、友だちの吉見大輔くんがインターネット上に書いている日記を読んだら、空席問題が取りあげられていた。

**2002年6月3日（月曜） 快晴**

ワールドカップに浸りながらも、スタジアムに目立つ空席を目にするにつけ、ふつふつと怒りが沸き、またやましさにささいなまれ、このまま大会を見続けてよいのだろうかと自問自答する。ワールドカップとのつきあひも、これを最後とすべき瀬戸際に来ているのではないかと問わずにいられない。

正規であってもまともとは思えない値段をつけられ、販売方法も煩雑な手続きを踏まされ、個人情報も提出させられ、当たってもいないチケットの代金を払い込まされ、ハズレたために手数料1500円を損し、かなりの時間を申し込みのために割いた挙げ句、私は一枚も当選しなかった。そのあとで転売禁止は有名無実となり、闇市場に高価格のチケットが出回り、私は泣く泣く一枚を買った。

幸運にもその後、私はいくつかの試合に誘われもし、見に行くことができるようになったが、その幸運がどこから来たのかを考えると、気分は重くなる。私はフットボールのために、現状を批判する具体的な行動を取るべきではないかと焦ってくる。

私はナメられていると感じる。このやり方に従ってカネを出すことは、それが正規であれ闇であれ、フットボールのことよりもカネを吸い尽くすことしか考えていないFIFAの戦略に同意するようなもの。一流の試合を見せてやるから有り金出しな、と言われて、素直に出すなんて、悲しすぎる。フットボールとは、自分の尊厳と引き替えにしてでも見る価値のあるものか？ たかが、フットボールではないか。

そう思いながらも、私は買ってしまった。値段と無関係に、すばらしいフットボールの試合は奇跡として無垢のままだとわかっているからだ。それでも、自分を惨めだと感じている。

このチケット問題は、選手の怪我の多さとも結びついている。インテリたちは、フットボールが暴走する資本主義やグローバリゼーションの最先端に位置していることを指摘する。しかし、そう書いた者たちが、チケットを入手する苦労や闇で高値を払う惨めさも知らずに、招待チケットで日本戦や決勝を観戦する。

歯止めのない市場経済がフットボールの敵だと思えば、本当はこんな運営の大会など、観戦者がボイコットするべきなのだ。誰のための大会だ、と怒るなら、現状のFIFAが与える試合など拒絶するべきなのだ。

まったく同感だったが、そうは言っても一番、フットボールを拒絶できないのは吉見くん自身でしょう、と突っ込みたくもなった。

## ★キチ

クラブ仲間とかから、今晚はフットボール・バーに行って日本対ベルギー戦を見ようぜと、いろいろ誘われたけれど、俺はすべて断って、夕方5時にコンビニの仕事が引けると、アパートに帰って一人で試合を見た。なぜって、俺が連中と一緒に日本代表の試合に盛り上がるかどうか、わからないじゃないか！ だって俺はブラジル人なのだ。この10年、自分がブラジル人であることなんか忘れて、というか、なかったことにして生きてきたけど、じゃあ日本人として生きてきたのか、と問われれば、絶対にそうじゃない、と断言したい。俺が日本人だったら、こんな最低な10年を送ったりしなかっただろう。

俺を、ガイジン扱いしないで仲間として受け入れてくれた友だちには、あんなワルたちでも感謝しているけど、でも俺は日本の中に受け入れられてはいなかった。そう感じたから、同じように、はじき出されたと感じているワルたちのところに行くしかなかった。あいつらと俺とは、その意識が同じだった。

でも、意識よりもっと手前のところが、俺とあいつらとは違う。それは留置場から釈放された後にはっきりした。俺が日本人だったら、そこから社会復帰に行くところを、俺は入管の「待合室」に収容されて、ブラジルに無理やり送り返されそうになったわけだ。日本人のワルたちが有罪になったからと言って、日本の外に捨てられるか？ 放り出されたりするか？

あの苦しさは、誰にも分かち合えない。俺はまるで、太平洋かどこか広大な海の上の、空中に浮いた風船の中に閉じ込められたような気分だった。俺の居る場所、帰る場所は、そこしかないのだ。

だから日本代表は俺のものじゃない。つい仲間内気分ひたって、友だちと一緒にあって応援なんてしようものなら、「そろそろ、外国の人は帰ってくれないかね？ これからは、日本人だけで喜び合う時間なもので」とお引き取りを願われるだろう。

これまで、日本代表の試合を見てこなかったわけじゃない。それこそ、仲間内のノリで、つるんでた不良仲間のうちでテレビ観戦して盛り上がりたりした。でもそれは、ゲーセンとかバイクのチキンレースとかで盛り上がるのと変わらなかった。

今回、日本で開かれるワールドカップで日本がホームでの試合をするというのは、これまでとまったく空気が違う。みんなが、「俺たちのもの」として浮かれている。いつもは、自分はこの社会の鼻つまみ者だと思っている俺の友だちまで。鼻つまみ者でも、この「民族の祭り」には入れてもらえると、信じて疑わないでいられるのだ。そして俺は、自分がそこからはじかれていることをよく知っている。

キックオフ直前の国歌斉唱のときから、俺は、「おまえはよそ者だからな」と名指して忠告されている気分になった。俺は日本の国歌をよく知らなかった。ケンカしかなかった学校時代、そんなものは歌わなかった。だから覚えなかった。そんな必要もなかったから。でも、今、アパートの外に出ればあちこちの家で歌っている声が聞こえそうなほど全員が一緒になっている光景、顔は誇りに輝き、充実し、目は興奮して黒くなっている、その様子を感じて、俺は打ちのめされた。

ブラジル国歌なら歌える。でも、もしブラジルにいるブラジル人たちと一緒に歌ったら、俺は後ろめたく感じて声が小さくなり、ついには歌いやめてしまうだろう。それほど、俺には自信がない。

でも試合が始まると、俺はすぐに我を忘れて熱中した。日本代表の一挙手一投足に、一喜一憂した。オフサイドトラップの掛けそこないから先制点を奪われたときは、絶望感でいっぱいになった。けれど日本がまったくめげず、高い集中力を持って同点、さらには逆転したときは、絶叫して、何度も拳を突き上げた。ここにベルギー人がいるわけじゃないのに、俺は見えない仮想ベルギー人サポーターに向かって、中指を突き立てた。窓を開けていたので、あちこちの家から歓声上がるのが聞こえてくる。「おまえのものじゃないんだからな、好意で一緒に盛り上がるのを許してやってるだけだからな、履き違えるなよ」と言われた気がし、俺は少し気落ちして冷静になった。

最終的には、またもや同じようなオフサイドトラップの掛けそこないで同点に追いつかれ、引き分けだった。でも、格上の相手に対し強い気持ちで臨み、互角以上の試合を展開した戦いぶりに、俺は興奮した。やってやった！という感情に支配されて、一人で何度も声を上げ、ガッツポーズした。

それは俺が一人だったからできたことだ。他に人がいたら、俺は自分がその一員ではないという思いで、ひたすら小さくなっていただろう。でも誰もいないところでは、俺は日本代表を応援してもよいのだった。

俺の気持ちは間違いなく、このチームに入り込んでいる。それは変えられない。日本人かどうかなんてどうでもいい。俺はこのチームのファンなんだ。サポーターなんだ。俺は地元のクラブ、例えばコリンチャンスに肩入れするようつもりでこのチームを応援する。俺がこのチームを選んだんだ。

このチームの左サイドには、アレックスAlexというブラジル人がいる。Santos Alessandroという本名に「三都主アレサンドロ」と日本の文字を当てて、日本国籍を取得した。あいつは日本に生まれたわけでも日本人の血が流れてるわけでもない。それなのに日本代表でプレーしているのは、アレックス自身が日本を選んだのだ。俺も応援する側として、同じ位置に立ちたい。日本人ではないけれど、日本を選んで応援する。なぜなら、ここで生きているから。

俺は一人で缶ビールを掲げ、祝杯をあげた。日本代表が勝ち点1を取ったからじゃない。この日は、俺が正式に日本代表サポとして認められた日だからだ！

## ★穰治

夜勤明けで昼間に寝てから日本対ベルギー戦を見たせいもあって、今朝は昂揚してあまり眠れないまま昼勤に就く。事故ったりすると、「ワールドカップの見過ぎによる睡眠不足が原因」って騒がれて、会社に迷惑がかかるから、慎重に運転する。

夕方6時に上がると、林田と飯を食いに行く。夜8時からキックオフのアイルランド対ドイツという大一番を見に、二人してアイリッシュ・パブに乗り込む計画なのだ。

戦いに備えるならスタミナをつけなくてはと、林田オススメの韓国料理を食べに新大久保へ行った。当然、話は昨日の日本戦のことになると思いきや、ぼくがその話をまくしたてても林田はいまいち乗ってこず、ここは在日の人がやってる韓国料理屋なんだから、あんまり日本代表の話ばかりしないほうがいい、みたいなことを言う。「別に韓国の悪口言ってるんじゃないからいいでしょう」と反論すると、「だから韓国代表の話しようぜ」と言う。

「林田は見たの？ ぼくは日本戦で手いっぱい無理だった」

「俺は両方見たよ。韓国がポーランドに圧勝したのは知ってるよね？」

「結果は知ってるけど、内容的にも圧勝？」

「ほぼ完勝。まあ、ポーランドは何でワールドカップ出てきたの？ってレベルだけどね」

ぼくは、韓国料理屋で日本戦の話は控えたほうがいいと言ってるくせに、ポーランド人がいないのをいいことにこんな見下した言い方を平気でするのもどうかと思ったが、黙っておいた。韓国が強敵を倒した、と言われるより、相手が弱かったから勝てた、と思うほうが、何となくホッとしたからだ。でも、何で、韓国の強さを証明するわけじゃないと思えたほうがホッとするのだろうか？

「でもね、韓国にとっては特別な1勝なんだよ。何てたって、6回目のワールドカップ出場で、初めて勝ったんだから。そりゃもう、ヒディンクGuus Hiddink様様だよ」

林田は、韓国じゅうが韓国代表に熱狂してすごいことになっていることも話した。

「サポーターは『レッドデビルズRed Debils』っていう名前なんだけど、“Be The Reds”という真っ赤なTシャツを作って、それが爆発的に流行って、スタジアムじゅうが着てるんだよ。浦和レッズの比じゃないよ。それで、テーハンミングッDaehan Mingukって叫んで5回拍手して、両腕をこう広げて応援するんだ」

林田が実演してみせると、店の従業員や客の何人かが笑顔で林田のほうを見た。その一人と目が合った林田は、親指を立てて応えた。

「へえ、林田、溶け込んでるじゃん」

「まあね。アイリッシュ・パブでアイルランド戦もいいけど、韓国居酒屋で韓国戦もなかなかだよ。ってか、アイルランドの比じゃないって。人数多いし、地元開催なんだから」



「日本だってすごいじゃん。昨日の渋谷の映像、見た？ ス克蘭ブル交差点がぼくたちぐらいの年の若い連中に占拠されたみたいになって、みんなハイタッチして。知ってたらぼくも行けばよかったと思って。日本じゃないみたいだったよね。ブラジルとかだとさ、フットボールのときに街がああやって人で埋め尽くされてお祭り騒ぎになったりするんでしょ」

「穰治、おまえ、アイルランド応援してんのか日本応援してんのか、どっちなんだよ」

「そんなの決められないでしょ。アイルランドはもうめっちゃくちゃ好きだけど、日本人なんだし、日本を応援するのは普通のことだし」

林田は少し暗い顔になって黙り込んでしまったので、ぼくは気まずかった。沈黙のままカルビを食い、チャプチェを食う。

「ともかく今日はアイルランドの命運がかかっている日なんだから、早く食ってパブ行こう」と林田がやっと口を開いてくれたので、ぼくもホッとしてうなずいた。

恵比寿のアイリッシュパブ「O'Gorman's」に行ったのは、もちろん、あのロイ・キーン命のアイルランド人を迎えに行ったときに知り、店内の熱気に憧れを抱いたからだ。もしかしたら、キーン命も来ているかもしれない、そうしたら今度は一緒に飲みながら観戦できる、という期待もあったが、彼はいなかった。カシマスタジアムに応援に行っているのだろう。

パブでは白い壁がスクリーン代わりとなり、そこにモニターの映像が映っていた。ぼくたちが入っていったときはもう、ドイツ代表とアイルランド代表の選手がアップをしている様子が映し出されている。アイルランドの選手が映るたび、パブにいる芝生色のユニを着た白人が、選手名とともに何かを呼びかけている。

「いいね、ほんとにスタジアムにいるみたいだ」

「俺は昨日もそうだったけどな」

ときおり、カメルーン戦でのホルランドの得点シーンが映ったりもするけれど、やはりテレビの目線はドイツ寄り、特に初戦サウジアラビア戦でハットトリックと大爆発した新星ミロスラフ・クローゼMiroslav Kloseは、注目の的だった。それから今大会のスターである、キーパーのオリバー・カーンOliver Kahn。その苦み走った顔を見て、林田は「さあ、これから悪者ドイツを退治してやろう」と言った。そして近くのアイルランド人に「Bad guy」とカーンを指さして言い、ライフルで狙い撃ちする真似をすると、彼は大喜びでYes、何とか何とかと話し、ぼくたちと乾杯をした。

試合が始まり、パブの空気がたちまち緊張に包まれる。ビールの片手間に観戦してるんじゃない。みんな本気で戦っているのだ。ぼくも息が苦しくなるような圧迫を覚えた。やっぱりドイツは強くて、何だか攻撃に威圧感があるのだ。ほぼ五分五分の試合展開、わずかにドイツ優勢なのだが、その差以上にドイツの存在感はすごい。ミヒャエル・バラックMichael Ballackにボールが渡ると、見ているぼくの体がこわばってしまう。

アイルランドは例によってしつこく澁刺と、労をいとわずに守り、チャンスとなると愚直にダッシュを繰り返す。なぜこのチームはこれほどまでにシニカルさやネガティブな空気と無縁でいられるのだろう。

前半の中ごろ、バラックから守備の裏を狙った絶妙な浮き球に、アイルランド・ディフェンスの間を影のようにすり抜けたクローゼが、得意のヘディングでゴール。宙返りを見せた。

やっぱり強い、とぼくは溜息をついた。力の差を思い知らされる得点だった。けれど、パブ内が静まりかえったのは一瞬で、すぐにアイルランド人たちは歌を歌い始めた。国歌かもしれない。

「どうでもいいけど、今大会はモヒカンばかりだな」

ハーフタイムに入ってひと息つきながら、林田が指摘した。

「ドイツのツィーゲChristian Ziege？」

「そう。それにトルコのウミト・ダバラÜmit Davala。日本の戸田和幸。アメリカのクリント・マティスClint MATHIS」

「林田、どれだけ試合見てるんだよ」

「全部。Sky PerfecTVに加入したからね。で、そのモヒカンのもとは、言うまでもなくベッカムDavid Beckhamね。ベッカムがソフトモヒカンにしたんで、モヒカンも流行ってるわけ」

「ああ、ベッカム様ね。すごい人気だよ。その話ばかりだもんな」

日本の若い女の人にとってベッカムは、まるでカトリック信者にとってのローマ法王のようだった。テレビでも雑誌でも、ベッカムの姿を目にしなれないことはない。ベッカムが現れればみんなが信者のようにひれ伏し、近寄り、その手にキスをしたが。実際にはしないけど、そんな具合に催眠状態に陥っている。

後半に入ると、アイルランドは反撃し始め、終盤に向かうにつれてその猛攻がすさまじくなっていった。疲れを知らないしつこさで、攻めまくる。何度も決定的なチャンスを作ったが、その前に立ち上がったのがカーンだった。野生のチンパンジーか何かのように、シュートに食らいついてボールに触る。パブの中はどよめきと溜息の連続となった。

これだけ攻めても、やっぱりドイツの、カーンの壁は崩せないのか、とぼくが諦めかけていた後半ロスタイム、残りあと1分というとき。

右サイドでスローインのボールを受けたスティーブ・フィナンSteve Finnanが、ドイツのペナルティエリアめがけてロングボールを放り込む。それを途中交代で入った大ベテランにして195センチもの長身フォワード、ナイアル・クインNiall Quinnが、ドイツの壁のようなディフェンダーたちに競り勝ち、ヘディングでゴール前へと落とす。そこへ、まるで試合開始直後のようなエネルギーで猛然と走り込んできたのがロビー・キーンRobbie Keane。ドイツのセンターバック2人はついてこれない。カーンの目の前で追いついてシュートしたボールは、横っ飛びしたカーンのどこかに当たって少しコースが変わり、ゴールポストを叩き、ゴールの内側に跳ね返ってネットを揺らした。

キーンはその勢いのまま側転を見せ、アイルランドサポーターにガッツポーズ。そこに選手たちがかけよって団子となって抱き合う。

パブの中も、まるで優勝したような、ほとんど狂気といってもいいカタルシスが炸裂した。ぼくは林田とビールをかけ合っていた。あたりのアイルランド人と片っ端から抱き合った。あの光景は鮮明に覚えているのに、まるでぼくの記憶じゃないみたいに感じられる。なぜなら、ぼくの意識はほとんど飛びかけていたから。

そう、あのとき、ぼくはフットボールの神様と出会ってしまったのだ。この試合は、フットボールの魂そのものだった。ぼくの心と体の中に、新しい「キーン」という名前が刻まれた。あのロイ・キーン命の男も、今ごろはロビー・キーン命になっているだろう。

しばらく余韻にひたっていたくて、ぼくと林田はギネスを飲み続けた。まるで楽園にいるかのようだった。

今の試合を熱く語り合っている最中、だいぶ酔った林田がまったく脈絡もなく、「俺、本名、イム・ヨンウYeong-Woo Limだから」と口走った。最初、ぼくは何を言っているのかわからず、「何？」と聞き返す。

「だから、本名はイムだって言うてんの。林田英佑Eisuke Hayashidaは通名。『林』って書いて、イム」

それでもぼくは何を言われているのかわからず、ぼかんとして林田の顔を見ていた。

「穰治、頭悪いの？ 俺は在日だって言うてんだよ」

「ああ、そういう意味なの？」

「意味じゃねえ、イムだよ」

「イムって呼んでくれってこと？」

「バカ、呼ぶんじゃねえよ。特に職場では」

「ごめん、俺、バカかも。この話は何？ 林田が在日だと何だっというの？」

「日本代表なんか応援できるかっての」

林田は怒ったように怒鳴った。

「ああ、そういうことか。それでさっき、不機嫌だったのか。ごめんごめん。俺、知らないで話、振りまくってたよね」

「いいんだよ、穰治は日本代表応援してるんだから。俺だって嫌いってわけじゃねえよ。昨日もいいゲームしてたよ。俺も日本勝ってって思ったよ。でもあからさまに応援する気にはならないんだよ。穰治はさっき、日本人だから日本を応援するのは当然みたいに言うてただろ。そういうこと言われると俺、日本代表を応援する資格なしってことになって、はっきり言うて俺は日本と韓国共催のワールドカップなんて、消えてなくなればいいって思ったりするんだよ」

林田は酔って少し舌をもつれさせながら、脈絡を飛ばして話し続ける。

「でもこうして見に来てるじゃん。それですげえ楽しいでしょ？」

「うん」林田はやけに素直にうなづく。

「だったらいいじゃん、俺らはアイルランド応援しようよ。俺の原点だから。熱烈なアイルランド・サポってことで」

林田は小さく小刻みにうなずいてから、にやりと笑い、「それ、いいかも」と言った。

## ★典子

吉見くんの日記をのぞいて笑った。あれだけ熱烈なアルゼンチン・ファンだから、イングランド戦での敗北にさぞやがっかりしているだろう、どんなことを書いているだろうと思ったら、たった一行、これだけ。

**2002年6月7日（金曜） 快晴**

**きょうは何も書きたくない。**

私もラテンアメリカびいきの人間として、アルゼンチンを応援していた。何しろ、日本はイングランド・ファンだらけなのだ。ワールドカップの期間中、Three Lionsの白いレプリカを着て、髪をベツカム・スタイルにしている若者が、そこここでうろちよろしている。あれが気に入らない。

この日のアルゼンチン対イングランド戦も、スタジアムはイングランド・ファンの日本人だらけで、完全にイングランドのホームと化していた。イングランド人でもなくせに、God Save The Queenを歌い、England!と叫んで両手を挙げる応援をしている。何このイングランド人気取りは、恥ずか

しくないのか、と私なんかは思ってしまう。この人たちにとっての神は、ベッカム様なのだ。間違ってもSorinを真似て、小汚い真っ黒なロン毛にしているアルゼンチン・ファンなんかいない。

けれど試合は、そのベッカム様が活躍した。アルゼンチンはボールを保持して何度もイングランドを崩したけれど、シュートが決まらない。イングランドはロングボールを交えたカウンターで対抗する。

前半の終わりごろ、分厚い攻めを見せたイングランドは、ペナルティエリアでいったんボールを奪われるが、ベッカムがすぐさま奪い返し、その球をニッキー・バットNicky BUTTがペナルティエリア左にいたマイケル・オーウェンMichael OWENへ送る。オーウェンは対峙したポチェッティーノMauricio POCHETTHINOと駆け引きをし、一瞬早く右へ抜ける。たまらずポチェッティーノは左脚を伸ばした。オーウェンは引っかけられ、PK。キッカーはベッカム。集中を高めるベッカムに、1998年フランス大会でベッカムを挑発しレッドカードで退場させたディエゴ・シメオネDiego SIMEONEが近寄り、握手を求める。盛り上げてくれるじゃないの、チンピラのシメオネ！ベッカムは無視し、ものすごいキックを決めてイングランド先制。結局、虎の子の1点を守り切ったイングランドが勝利した。私は、アルゼンチンがすごくいいフットボールをしながら、点を決められないことが気になった。ナイジェリア戦もそうだったし。なぜなのだろう？

#### ★穰治

2002年6月8日（土曜） 晴れ

一晩明けて気分は穏やかになったが、空の水色がきのうとまるで違って見える。もう、ワールドカップのための晴天だとは思えない。ワールドカップは見続けるが、それは日常生活の一部でしかない。韓国へ行って試合を観ようかどうか、という迷いも消えた。ひとまず、私に取り憑いていた熱狂はどこかへ去ってしまったようだ。アルゼンチンは密度の高い試合をし、ほんの紙一重で一敗しただけだが、私にとっては何かが決定的に変わってしまった。

たかがフットボールでなぜこんなに苦しむのかと思うが、きつかった。この地獄を素通りできるフットボール通は、本当はフットボール愛好家なのではなく、単なるフットボール批評愛好家で、フットボールとともにあるのではなく、「フットボールをわかっている自分」を愛しているだけなのだ、などと恨めしく思ったりする。この悪夢から立ち直れば、人間としてひとまわり強くなれるというわけでもない。もしそうであれば、ブラジルやアルゼンチンの男どもは人間的に大人であるはずだが、実際はいつまでたっても子どもっぽい。むしろフットボールは人を子どもっぽくする。

ウンベルト・エーコUmberto Ecoの言うように、やはりフットボールは「民衆のアヘン」なのだろうか。私はアヘン中毒患者なのだろうか。ニック・ホーンビィNick Hornbyの『FEVER PITCH』をばらばらとめくり返す。

「多くのファンは怒りを表に出す。対象はひいきのチームだったり、相手のサポーターだったりする。思わず悪口雑言が口をついて出てくるような、リアルな怒りだ。そしてそのことが、ぼくを悲しませる。ぼくは、そんなふうには怒りたいとは思わない。一人になって思いにふけり、そのへんを転げまわって発散し、すべてを一からやりなおせる力をとりもどしたいだけだ。だがネクタイを締めたやつらは、同情しさえすれ、理解しようとはしてくれない。飲み物はどうかとこ

ちらに差しだし、ぼくが断ると握手して哀れんでくれるだけ。だからぼくは消えるしかない。彼らにとってはただのゲームだ」

これは日本でいう天皇杯に当たる、イングランドFA Cupの1978年決勝の様様。「ネクタイを締めたやつら」とは、「その午後を乗り切れるくらいのフットボールの知識しか持たないまま、十分に試合を楽しみ、そのドラマと興奮と流れを楽しんでいた」物腰柔らかな中年紳士たちのこと、つまり、普段はフットボールに肩入れすることなく、どのクラブチームにも無関心で、ビッグゲームのときだけ饒舌になるアッパーミドルupper-middleの人間たち。「片やぼくは、その一瞬一瞬を心から憎んだ」。なぜならアーセナルArsenalは負けたからだ。

ところで、フットボールチームは中堅だがフットボール文化は極めてマイナーであるアメリカでは、ブラジル人と接する機会も少ないのだろう。ブッシュ大統領はブラジルのカルドーゾ大統領と会談した際、「あなたの国にも黒人はいますか？」と尋ねてカルドーゾ大統領を絶句させたという。その無知、その世界観の異様な狭さにおいて、ブッシュ大統領は、アメリカの歴史に名を残すだろう。世界のことを常識的なレベルでさえ何も知らず、そのために彼にとっては世界はアメリカだけで、アメリカを受け入れない他国の者はみな悪か敵だと本気で思ってしまうような人間が、世界最大の軍事力と核兵器のボタンを握っている。どんな荒唐無稽で安っぽい劇映画でも敵わないほどバカバカしい冗談の中に、この世界に住む私たちは置かれている。

アルゼンチンに思い入れのないぼくからすると、吉見大輔の感傷は大袈裟に見えるけれど、もしアイルランドが負けたらぼくも同じ気分になるかもしれない。もしかしたら、日本代表が負けるよりも、ショックを受けるかもしれない。その意味で、吉見大輔の気持ちはよく理解できた。

勝ち抜き戦であるワールドカップは、一つのチームを除いて、どこかで必ず負けるわけだから、大半のファンは理不尽な苦しみを味わうわけだ。意識が飛ぶようなあの無上の喜びと、どうやっても消せない苦しみとが、両方あるのがフットボールなんだろう。きっと、その両極端な感情を知ること、ぼくたちは不条理な人生に対する耐性ができるのかもしれない。

日本は第2戦、対ロシア戦で、ワールドカップ初勝利を手にした。職場に残って、同僚たちとテレビ観戦した。内容がよかったから、すごく盛り上がったし気持ちよかった。同僚たちとハイタッチもした。けれど、職場に残らずに足早に帰宅した林田のことも、ずっと頭の中にあった。あいつもこの内容なら、きっと喜んでいるだろう。でも、一人で。

14日の第3戦は、林田と韓国料理屋で韓国対ポルトガル戦を見に行こうと思い、メールした。「OK」と、一秒後に返信が来た。

2002年6月10日（月曜） 晴れ

モスクワで、ロシアチームの敗戦にキレたフリーガンが暴動を起こし、それに極右の連中が便乗し、死亡者まで出て、日本人も襲われて怪我をするという事件が起きた。懸念されていた事態が、予想に反してモスクワで最初に現れたのだ。しかし、ネオナチが最も過激化しているロシアであれば、予想されてしかるべきだった。極右の登場する背景を考えると、ロシアの極右のほうが西ヨーロッパの極右より底なしなようで恐ろしく感じる。もちろん、こんな騒ぎはフットボールの敵である。しかし、フットボールがそのすぐ間近にあることも確かだ。日本の夕刊紙では、対ロシア戦勝利を、日露戦争時のバルチック艦隊撃破になぞらえていたそうだが、ロシアの極右が日本人を襲撃したという現実の前で、まったく洒落にならない、背筋の寒くなる

ほど貧困な想像力だというほかない。ロシアのネオナチは冗談ではなく本気で日露戦争を持ち出してくるだろう。日本のメディアの何というお気楽さ。

韓国—アメリカ戦は予想どおりタイトな試合になったが、ムードは熱戦というよりもっと異様なものだった。アメリカはあの環境でよくも平然と戦い、先取点を挙げられたものと驚いた。この無神経さはすごい。フットボール文化の不毛なアメリカなので、きっと手厚い声援に守られて戦った経験が少なく、中米諸国などのアウェイで激しい罵声を浴びて戦うことに慣れているのかもしれない。韓国—ポルトガル戦もすさまじい試合となりそうだ。

韓国対アメリカ戦のスタジアムは、またアイルランドとは違った熱狂に包まれていた。こういう言いがちかどうかはわからないけれど、何か新興宗教の大会とかを見ているみたいだった。

じつは韓国は、このとき、アメリカに対し激しい執念を燃やしていたらしい。

ことは半年前にさかのぼる。2002年2月に行われたソルトレイクシティの冬季オリンピック、スケートのショートトラック1500メートル決勝で、韓国のキム・ドンソン Kim Dong-sungが1着でゴールしたのに、2位のアメリカ人選手アポロ・アントン・オーノ Apolo Anton Ohnoがキム・ドンソンに押されたようなジェスチャーをし、進路妨害が認められてキム・ドンソンは失格、オーノが金メダルとなった。いわばシミュレーションで審判をだましてPKをもぎ取ったようなものであり、韓国社会は怒りで沸騰した。アメリカのほうは、前年の9.11でナショナリズムが燃え盛っていた最中のオリンピックだったから、オーノへの賞賛が相次いだ。その後、オーノが韓国を挑発するような言動を繰り返したこともあり、韓国ではオーノは憎むべき卑劣な敵とされ、ついでにアメリカも仮想敵となったのである。

このため、ワールドカップでのアメリカ戦でも、場内は「憎きアメリカを倒せ」という赤い気分で一色に染まったのだった。

しかし、アメリカは動じることなくプレー、先制点を奪う。韓国は重圧からか、圧倒的に攻めてチャンスを量産するも、決定機を外しまくる。前半にPKを獲得したが、イ・ウリョン Lee Eul-Yongが失敗。

このまま試合は終わるのではないかというムードが漂い始めた後半30分過ぎ、交代で入ったアン・ジョンファン Ahn Jung-Hwanが、イ・ウリョンのフリーキックをヘディングで合わせて、ようやく同点。このとき、アン・ジョンファンはスケート選手の真似をし、オーノ役の他の選手が進路妨害されたアクションをするという、ゴール・パフォーマンスを見せた。会場は爆発的に沸いた。「かわいい！」と、美形フォワードのアン・ジョンファンに声を飛ばすおばさんもいたという。

ぼくは、もし得点が決まらずに負けていたら、どうなっただろうと想像した。あの怒りにたぎった中では、PKを外したイ・ウリョンは「戦犯」として、韓国中から叩かれるのではないだろうか。あるいはロシアでのように、韓国にいるアメリカ人が、極右とかチンピラとかに襲われるのだろうか。

林田ならどう思うだろう。聞いてみたいけれど、聞けないな。

## ★キチ

夕方ごろ、学校帰りの生徒なんかでコンビニの店内はそれなりに客が多く、忙しい時間帯だった。俺は同じアルバイトの宮入さんと一緒にレジに入っていた。列になっていた客をテンポよくさばき、

最後に俺がムサイ中年男の会計を終えると、しばし客が途絶えた。宮入さんは俺に、「今の人、作家の吉見大輔だよ」と小声で言った。

「誰っすか、それ」

「知らないの？ 知らないだろうね。作品よりも、フットボール好きってことのほうが有名なぐらいだから」

ヒゲは剃らず、薄い頭をふちどる髪は雑草のように乱れ、くたびれたTシャツにジャージのズボンという部屋着のまま、サンダルをつっかけている姿は、俺に言わせれば、浪人生以外、許されるものじゃなかった。まして、作家。誰が見てるかわからねえじゃねえか！ 現に今だって、文学オタクの宮入さんに見つかった。

「面白いんすか、その人の小説？」

「人を選ぶけどね」

つまらないわけじゃないけど、万人受けしないってことか。小説よりもフットボール好きってところが印象に残り、俺は家に帰ってから携帯で検索してみた。

ブラジルでは、インテリはフットボールに熱狂したりしない。そのくせ、大きな大会のビッグマッチだけ、いい席をせしめて、節度を持って盛り上がっていやがる。フットボールをたしなんでいやがる。

だから、フットボール好きを公言する作家は珍しい。バカで粗野で文化度が低い、と宣言しているようなものだ。

あの小汚い格好からすれば、そんな作家なのかもしれない。だったら、あんがい熱いハートでワールドカップも見ているかもしれない。

そう思って、吉見大輔のブログを読んでみた。

## 2002年6月12日（水曜） 晴れ

とても悲しい。フットボールを見ていてこんなにつらい気分は初めてだ。この喪失はもう二度と埋められない。試合の始まる前には、ずっとピアソラPiazzollaを聴いていた。アルゼンチンの勝利を願って気分を盛り上げるためではない。ピアソラのタンゴのようなあのフットボールが、かけがえのないものであることを確かめたかったのだ。ピアソラの音楽はピアソラという個人の才能によるものだけど、その才能はピアソラの生まれ育ったアルゼンチンにタンゴという豊かな文化があったからこそ開花した。私がある一端に触れたブエノスアイレスのフットボールの文化は、日本人には想像もできないほど豊かで崇高なものだった。フットボールと生きる歓びは深い部分で分かちがたく結びついていた。こんなにすばらしいフットボールをするアルゼンチンが負けるはずがない、と誇りを持って信じていた。そういう厚い文化の土壌から、あの魅力的なフットボールは現れた。そのアルゼンチンの人たちの絶望は、奥深いフットボール文化とともに育ってはいない私には理解しきれないだろう。理解はしきれないが、それでも泣きたくなる。ピアソラのタンゴは、美しく切なく、複雑精緻なリズムは流れては崩れ、高い能力を持つ各楽器のプレイヤーが、それぞれのスタイルで超絶技巧のインプロビゼーションを織り交ぜながら、隙のないアンサンブルを繰り広げる。そのスウィング感、ドライブ感、いまのアルゼンチン・フットボールそのものだ。個性とフットボールの普遍性とが調和したとき、フットボールはそのチーム独自の美しさをたたえる。アルゼンチンのフットボールはその極みだった。これほ

ど見ていて陶醉できるフットボールは、ジダンZinedine Zidaneのプレーを除くと、いままであり得なかった。

そのフットボールが、いくらでも取り替えのきく、凡庸で退屈でフットボールと呼んでいいのかどうかためらうようなプレーに敗れた。スウェーデンもイングランドも、アルゼンチンと比べれば弱いチームで明らかに格下だったが、それなりに経験のある強豪の末席にいることは間違いない。けれど、彼らの戦い方は、ワールドカップ初出場の弱小チームが、強豪に対してしかけるような卑屈なものだった。見ている者の意気を阻喪させる、歓びのないプレーだった。こういうものがフットボールであるのなら、私はもうフットボールなど見る必要を感じない。ワールドカップのたびに、この手の、どこにでもある没個性的なチームを見ては同じことを思っ腹立たしくなるが、今回は嫌悪に近い。

私にとってビエルサMarcelo Bielsaのアルゼンチンこそは、新しい時代の新しいフットボールだった。これが優勝することで、あの退屈で陳腐な北ヨーロッパ型フットボールは死を宣告されるだろうと思っていた。ジダンのフランスとアルゼンチンが対戦することで、フットボールを見る人すべてが、何がフットボールの魅力なのかを文句のない驚きとともに理解する日が来るのだと期待し、わくわくしていた。

今日の試合前（もう遠い出来事のような気がする）、スポーツ雑誌「Number」に載っていた、イングランド戦を終えたあとのシメオネSimeoneのインタビューを読んで、私はアルゼンチンはやっぱり勝つと信じていた。

「フットボールは、黙って立っていてもはじまらないスポーツだ。動けば動くほど、試合は展開していき、興奮も高まっていく。その瞬間のカタルシスがフットボールの魅力じゃないかな？もし、アルゼンチンのフットボールを「野蛮」という一言で言い切ってしまう奴がいるとしたら、それはフットボールの本当の醍醐味を知らない奴……俺はそいつを憐れむね。俺は、そいつがいう野蛮さを楽しんでいる選手なんだ（笑）。」

勝てなかった原因はこれから考えるべきことだろう。3試合ともセットプレー以外で得点できなかったのだから、何かが足りなかったのは確かだ。緩急のリズムはあったけれど、超高速の速攻はあまり見られなかった、つまりスピードが不足していたとか、ロングシュートが枠に飛ばないとか、同じ型の攻撃を繰り返す戦術がよかったのかどうか、とかいろいろ思い浮かびはするが、どれも結果論であり、それを改善すれば完成するというようなものではない。ただ、私にはアルゼンチンの方針が間違っていたとは思えないのだ。この方向のフットボールを貫いて、いつかあの退屈なフットボールをすべて粉碎して優勝してほしいと切望する。

ろくでもないことに、私はアルゼンチンの命運のかかる日に、大阪へイングランドーナイジェリア戦などを見に行ってしまった。まだ生でワールドカップを見られる当てがなかったときに、つい闇で入手してしまったチケットだった。定価の3倍の8万円を払って見た試合は、その10分の1の値段にも値しない凡戦だった。おまけに私は同時刻に他会場で行われているアルゼンチン対スウェーデン戦をラジオで聞いていて、目の前の試合はまったく見えていなかった。モチベーションのない試合に臨んでいる両チームを責めることはできない。行った私がバカただけだ。予選リーグの3試合目はこの手のゲームが多いのだから気をつけなければいけないということ、高い授業料を払って学んだようなものだ。まだフットボール文化が未熟な国の観客にとっても、こういう失敗を重ねて学ぶべきことは多い。



思ったとおり、正真正銘のバカだった！ いや、思った以上だ。

何しろ、まずアルゼンチンにこんなに肩入れしてるんだから。あんな、汚くて、小ずるくて、闘志がむき出しなら価値があると思込んでいて、優雅さを知らない連中の、どこがいいんだ？

オルテガOrtegaなんて、卑しいことこの上ないだろう。確かに上手いけれど、それを卑しい心根が台なしにしている。Burritoだぜ、ロバだぜ！

退屈なフットボールばかりって、おいおい、ブラジルを忘れてないか。それでフットボール好きって言えるのか？ まさかブラジルの試合を見てないなんてことはないだろうな。まあ、いまいち冴えないことは確かなんだけど……。

そんなふうにかッとなって反応している自分に、俺は驚いた。だって、アルゼンチンにこんな過剰反応するの、ブラジル人しかありえないから。

でも吉見大輔が、アルゼンチンでなくブラジルに熱狂してこのブログを書いていたとしたら、逆に俺は激しく共鳴しただろう。というか、共鳴しているのだ、フットボールへの思い入れ自体には。8万円って、俺の給料の半月分だぜ、そんな額のチケットを買っというて、目の前の試合は見てないんだよ。どれだけアルゼンチンに魂持っていかれてるんだ。普通じゃねえよ。

フットボールにそれだけの価値があるってことだ。それは今、俺自身が身をもって実感しているところだ。

あれから俺は、暇さえあればワールドカップを見ている。日本戦もブラジル戦もアイルランド戦も、全部見ている。ただし、一人で。フットボールは誰とも見たくなかった。一人でいれば、俺が日本戦に心を揺さぶられ、ブラジル戦に血湧き肉躍らせることが、正しいと思えた。どちらというのではなく、その両方に肩入れしておかしくないと思える。

長いこと、俺はブラジル人と接していない。まだ日本に来たばかりのころ、もし同じクラスにでも日系ブラジル人がいたら、俺はつるんでいただろう。その中だけで生きて日本に背を向けて、日本語もなかなか覚えずに、もっと肩身の狭い思いをしていただろう。

でもそうならなかった。あんなワル仲間でも、自分は日本人に受け入れられていた。だから日本語も覚えだし、勉強しなかったけど、読み書きも最低限はできるようになった。彼女ができたとき、バカすぎる男は嫌だと言われて、教え込まれたのだ。

自分の中のブラジル人を封じたことと、いつの間にか俺が日本の中の端っこの一員になっていたこととは、つながっている。

俺が15歳のころ、愛知県でエルクラノHerculanoという14歳の日系ブラジル人が、日本人の不良グループに殺されるという事件が起こった。そのグループは、日系ブラジル人の不良グループと対立してケンカをしていたのだが、まったく関係のない、不良でもないエルクラノを間違っってリンチして殺してしまったのだ。

当時、俺は親父から聞いて、事件が起こったことだけは知っていた。俺も不良だったから、親父は俺が同じような事件に巻き込まれるんじゃないかと心配して、注意してきたのだ。俺は頭に来て親父を殴った。ひどくイライラしたが、不良仲間は誰も俺を見る目を変えたりしなかった。俺がブラジル人かどうかなんて、気にしてなかった。だから俺はその事件のことを、それ以上知らないまま、忘れた。同時に俺は、無意識に自分の中のブラジル人を封じた。

あの環境がよかったのか悪かったのか、俺にはわからない。ただ、俺はおかげで不良仲間とはいえず、この日本の現地人に溶け込み、その一員になっていったのだ。

自分の中身がそうなっていることを、日本代表とブラジル代表の試合を見ることで、俺は知った。日本の一員になりかけている部分と、ブラジルである根っこ、どちらも俺の真実の姿だ。矛盾していようが、どちらが本物でどちらがまやかしいということはない。どっちも俺だ。

でも俺は吉見大輔のブログを読んで、一人でフットボールを見ていることを寂しく感じた。誰かと一緒に見たいと思った。でもまだ日本代表やブラジル代表の試合は、無理だ。それで思いついたのが、あのアイリッシュ・パブだった。決勝ラウンドに入ったら、アイルランドの試合をアイルランド人ぎっしりのあの店で見ようと決めた。

## 緑のシャツ Camisetas Verdes

### 第3回

#### ★典子

エネルギーを全開にするワールドカップは、楽しいけれどヘトヘトになる。まして、お祭り騒ぎが人生のすべてで、感情の浮き沈みが激しいメキシコ人の集団と10日間もつきあっていると。

一昨日はくたびれ果てた。通訳ガイドとして一緒に組んでいた、まだ学生的美加雄Mikaoくんが、ツアー客のGloriaとトラブルを起こしてしまったのだ。メキシコ人の性格をよく知らない日本の若い男の子や女の子は、ほとんど息をするように無意識に口説いたり色目を使ったりしてくるメキシコ人に免疫がなく、本気にして舞い上がってしまいがちなのだ。このお祭りが非日常であることも、それを加速する原因だろう。

新婚夫婦で来ていて、おとなしくてかなり地味なGloriaだが、たまにこちらの言葉に、女の私でもちょっと鳥肌の立ちそうな蠱惑的な微笑で応じることがある。それをまた見たくて、Gloriaに笑ってもらおうと男たちは滑稽なほど必死になっている。もちろん、夫のEduardoがいつもぴったりと寄り添っているから、ほんの小さな隙を突いて。あんなにべたべたと仲が睦まじいのだから無駄なのに、と思うのは、女たちだけらしい。

でも通訳までがそこに巻き込まれてはまずい。Mikaoくんはかわいらしい顔立ちをしていて、ふだんはモテるのだろう。何だかムキになってGloriaに言い寄っていた。Eduardoとケンカにならないかとハラハラしたが、Eduardoは自信があるのか、泰然と構えている。

それをいいことに、Mikaoくんのアプローチはエスカレートしていった。日本の携帯の使い方を教えてメールアドレスを知ろうとしたり、CDをプレゼントしてカラオケに誘ったり。Gloriaも人が好いのか無意識のcoquetaなのか、もっと冷たく放っておけばいいのに、それなりに楽しそうなそぶりを見せたりするものだから、Mikaoくんは勘違いした。そして昨日の夕飯の後、店の外に誘い出してキスしようとしたのだ。

むろんMikaoくんには外れてもらうことになったが、Eduardoが金銭での補償を要求してきたのには参った。泰然としていたのは、そういう魂胆があったからかと、私も啞然とした。まったくメキシコ人のこういうところにはいつも悩まされる。

結局、百貨店で使える商品券1万円分を、みんなには内緒にするという条件で渡して、ことを納めた。商品券は私が何かでプレゼントされた私物だ。Mikaoくんに働いて返せと言いたいぐらいだ。

でも、それもあと2日。今日の大分での対イタリア戦が終われば、明日には皆帰国する。このツアーは1次リーグだけの観戦なのだ。

他のグループと一緒にチャーターしたバスで前日の14時に出発、まるまる14時間かけて大分に着いたのが、今日の16時。さすがにメキシコ人たちもぐったりして、元気がない。ホテルにチェックインし、しばらく休む。

18時から食事を取って、19時半にスタジアム入りするところには、しっかり試合に臨むだけのハイテンションに仕上がっているから、すごい。メキシコ人はプロフェッショナルの観客なのだ。

例によって濃緑のユニフォームに三色旗のフェイスペイント、ソンブレロsombbrero、ルチャドルluchadorのマスクmáscara、さらには半分裸のアステカ族aztecaの戦士など、メキシコ人サポーターたちのいでたちは多彩だ。エクアドルのときは、エクアドル・サポーターに黄色と青と赤の鳥の格好をしている人たちがたくさんいた。南米アンデス系の国々には、その格好の応援がけっこう多い。

だが、今日の会場は圧倒的にイタリア・ファンが占めている。といってもイタリア人サポーターは少なく、Azzurriのユニフォームを着たり、顔を地中海ブルーに塗ったり、フェイスペイントをしたりしているのは、日本人ばかり。

一方、われらがメキシコは声援の質と量で圧倒。試合前から、「México, México, la la la!」やCielito Lindoやウェーブで盛り上がりまくっている。イタリア選手の紹介が始まると、日本人たちが盛り上がり、メキシコ応援団はブーイング。けれど、ClaudiaとLupitaとLolaのミーハーおばさん3人組は、「Que guapísimo!」と言って、オーロラビジョンに映るインザーギなんかと一緒に写真を撮ったりしている。「敵でしょ?」と言うと、「だってメキシコにはイケメンguapoが全然いないじゃない!」。

試合中も日本の観客は、イタリアがボールを持つと盛り上がる。私のすぐ後ろの席にも、メキシコ人サポーターでひしめく席にもかかわらずイタリア・ファンの日本人男がいて、隣の彼女にいかにもイタリアが素晴らしいかをとうとうと解説している。わかったような口ぶりで、「注目はトッティFrancesco TOTTIね。この試合を指揮する王子だから。ワールドカップの彼をナマで見られたことの価値は、後になってわかってくる。フォワードは、裏へ抜け出すハンターのピッポPippoことインザーギFilippo INZAGHI、重戦車ビエリChristian VIERI、控えに甘くて柔らかいアレックスAlex。あ、デル・ピエロAlessandro DEL PIEROって呼んだほうが耳慣れてるかな。もう口にしてるだけで鳥肌が立ってくるね。それに比べてメキシコの選手、誰か知ってる人いる? いないでしょう。オーラがないよね。申し訳ないけど、その時点で負けてる」などとほざいている。

気に入らない。むかついた。すっかりイングランド人気分でベッカム様に熱狂している連中と同じだ。こういう輩はブランドに弱いのだ。自分の目でフットボールを見たりなんか、しないのだ。

イタリア負けろ! Que se pierde, Italia! 私は思わずスペイン語でそう叫んだ。まわりのメキシコ人がいっせいに私を見た。私はもう一度、Abajo pinche Italia! くたばれ、イタリア野郎! と叫んだ。まわりは笑い、Abajo!くたばれ! と唱和した。それで満足して黙ったら、誰かが、Abajo pinche cobarde! くたばれ、びびり屋! と叫んだ。またAbajoと唱和。

Abajo come pasta! くたばれ、パスタ食い!

Abajo! くたばれ!

¡Hórale que eres bien mexicana! すげえ、思いきりメキシコ人じゃん、と隣にいたAlexandroが私に言った。

そりゃそうだ、私もだてに5年もメキシコに住んでいないし、mexicanoのだんなんと12年も暮らしていない。私はAlexandroにそう言ったが、試合に夢中でもう聞いちゃいない。

初めてメキシコに行ったのは、17年前、25歳の時だった。弟の進Susumuを訪ねに行ったのだ。進はまだ17歳だったが、度重なる素行の悪さに両親が匙を投げ、メキシコに住む叔父の丸夫Tío Maruoのもとへ強制的に送り込んだのだ。中学の時は他校の生徒と集団でケンカして停学を食らい、高校に入ってからケンカは絶えず、さらには他校の女子生徒を妊娠させて、退学になった。母は弟であるTío Maruoに相談した。Tío Maruoも上司を殴って会社をクビになり、日本でやっていけない

と飛び出してメキシコに来た経緯を持つので、そんなに困ってるなら俺のところに寄せ、と言った。私は、いくら何でもやりすぎだ、親から捨てられたと思ったら進はさらに墜ちていくと猛反対したが、特に母は強硬で譲らなかった。

私は進のことが心配で、会社の夏休みに様子をうかがいに行ったわけである。Tío Maruoは現地ではTío Marioと呼ばれ、護身用の拳銃を隠し持つような、地域のボスの存在になっていた。進には「おまえはメキシコ人の中で暮らせ」と言ってバルガス一家familia Vargasを紹介し、進はそこでホームステイしていた。私が訪ねると、セニョーラ・バルガスseñora Vargasは歓待して泊まる部屋も用意してくれた。進は充実した顔をしていて、半年しかいないのに、結構なスペイン語を操ってバルガス家に溶け込んでいた。

そこに四日間滞在しただけで、進が立ち直っているのが私にもわかった。こんなに気にかけてかまってくれる人たちの中にいたら、まともにもなるだろう。影響を受けたのは進だけじゃなかった。私がすっかりハマってしまったのだ。

帰国してからも、あのかまってくる人たちの暑苦しい熱が忘れられず、日本で仕事している自分が死体とか皮だけとか、そんなうつろなものにしか思えず、明かに自分はメキシコに魂を置いてきてしまったと感じ、ひと月ほど働くと迷わず辞表を出し、アパートも引き払い、親には告げずにメキシコへ発った。

メキシコ国立自治大学UNAMに付属する外国人用のスペイン語学校CEPEに通っているとき、私と同様、会社を辞めてふらふらとメキシコに来ていた吉見大輔と知りあった。私より二つ若かったが、感覚が合ったのでよくつるんで行動した。当時、吉見くんはクラスにいる19歳のUtaというドイツ娘に夢中になっていた。あのころは、24歳の自分が19歳にイカレるなんて、変態かなあ、と悩んでいたが、今思えば、5歳差なんてほとんど同世代だ。

吉見くんは1年で帰国したが、私は大学院に入った。勉強したいことがあったというより、メキシコで暮らし続けたかったのだ。そこで社会学を学んでいるリカルドRicardoと出逢った。熱い恋をしたという記憶はないのだが、気がついたら当然のように一緒に暮らしていた。院を出てから私は日本人向けのツアー会社でガイドの仕事をしたが、ほどなくして妊娠。リッキーRickyの両親に説得されて式を挙げ、私は日本にいったん帰ることにした。自分ではっきりと意識したわけではなかったが、孫を持ち出せば両親と和解できるだろうと思ったのだろう。

母は、私が無断でメキシコに行ったことに激怒していた。進について、母の教育方針に逆らっていると感じたのだろう。加えて、私自身の人生が母の望むようなものではないことも気に食わなかったようだ。よもやガイジンのモノになるなんて。何年か前に電話をしたとき、そこまではっきりした言葉ではなかったが、そんなニュアンスのことを、私に唾を吐きつけるような剣幕で言い放った。私もかたくなになり、以降、私は実家と絶縁状態だったのだ。

父には妊娠と帰国を告げた。父は喜び、歓迎してくれたが、母はうちには来るなと拒絶した、と父が言っていた。

リッキーにそのような事情を話すと、自分も日本と一緒にいく、と言った。院を出て非常勤の講師や教師をしていたリッキーは、メキシコで就職するのだろうと聞いていたから、私は驚き、仕事はどうするのだ、と尋ねた。リッキーは、自分の専門は複数の移民社会間の関係や意識を調査研究することだから、日本をフィールドとすることもできるし、そうしたい。だから、まず日本で学び直す、と答える。じゃあ家計はどうなる、私はすぐには働けない、と問うと、ストリートでトルタ屋torteriaをしてもいい、とどこまでも暢気だ。日本じゃストリートに屋台の飲食店なんて出せない

の、と教えると、英語なら教えたことがあるから英語を教えようかな、と来る。ともかく何とかなるだろうと、私はリッキーとともに帰国し、強引に実家へ押しかけた。さすがに出て行けとは言われなかったが、母親は私とは顔も合わさず口もきかない。あたかもいないかのようにふるまう。でもリッキーには普通に接しているの、私も我慢した。

息子の陸・クワウテモックRiku Cuauthemocが生まれてからも、赤ん坊の面倒は見てくれるのに、依然として私とは話そうとしない。このかたくなさはいったいどこから来るのだろうと、私もただただ呆れ、でも意地になっている自分に、母と同じかたくなさを感じてイヤな気分になる。

Ricardoに、もうメキシコに戻る、と言うと、なだめられた。メキシコにはいつでも戻れるけど、典子が日本に帰ってきた目的はまだ果たしてないでしょ、ぼくはまだ日本語も日本の社会学も勉強中だから、ぼくは戻れない、典子もここにいるべきだと思う、典子だって、お母さんがぼくや陸を受け入れてるってことは典子のことも本当は受け入れてるけど、何か邪魔をしてそういう態度を取れないだけだって、わかってるでしょ。

リッキーの言うとおりであった。私にはMéxicoがあるんだから、がんばろうと思った。母にはここしかないのだから。

とは言え、私も限界だったので、実家は出ることにした。父から借金をして、近くに小さなアパートを借りた。そして私は日本の通訳ガイドの資格を取る勉強を始め、その間は、私の翻訳のアルバイトとリッキーのメキシコ・レストランのアルバイトとで食いつないだ。

陸が3歳になるころ、私は資格を取り、通訳やガイドの仕事始めた。今から約10年前だ。日本に、労働力として日系ブラジル人や日系ペルー人らが大量にデカセギに来たころだったから、仕事はあった。リッキーは彼らのコミュニティーにもよく出入りして、フィールドワークをしていたようだ。一方で在日朝鮮人や中華系の友人をいつの間にかたくさん作っていて、しばらくすると、いくつかの大学で非常勤のスペイン語教員の仕事を始めた。

進はメキシコで大学に進学し、卒業後は日系の精密機器販売会社に就職した。仕事中に知りあった取引先のメキシコ人女性と結婚し、子どもも生まれ、メキシコの通信会社に転職、さらにはそこも飛び出して仲間内でIT企業を起こしている。

しかし、一度も日本には帰ってこない。私はこまめに連絡を取っているし、Ricardoと里帰りするときに会ったりしているが、実家では存在しない者として、進の話題はタブーになっていた。

私が進を連れて帰れば母親も折れるんじゃないだろうか、と思い、進を説得したり父親に取りなしてくれるよう頼んだりしたが、進は、自分は一方的に切られたのだから、こちらから出向くことはできない、あちらから何かを言うてくるのでなければ筋が通らない、と取りつく島はない。

5年前、母親は膵臓癌を患った。私は意地でも面会に行かなかった。リッキーは行くべきだと言いつづけたが、私は、母が来てもいいと言わないかぎり行けない、と言いつづけた。進も帰らない。

そのまま、母は2年の闘病生活を経た後、亡くなった。

あのときの喪失感をどう言い表せばいいだろう。自分と母と進の愚かさに、号泣した。魂がすべて涙となって流れ出てしまいそうだった。どうやってももう、母との関係は修復できなくなってしまった。その取り返しのつかないさは、何ものでも埋めることができない。永遠に消えない深い傷として、私の胸の奥底に刻まれたままだ。

進がどんな思いを抱えているかは、私にはわからない。Skypeで死を伝えたとき、進はよそ見をして、「ふうん」と答えただけだった。「どうする、葬儀に帰ってくる？」と尋ねたが、首を横に振るだけ。「もう取り返しつかなくなって、あんたも悔しいかもしれないけど……」と私が言いかけ

たところで、「ないね。全然、ない。そりゃ、人は誰だって死ぬよね、知ってる人も知らない人も。人の死は悲しいよね。たとえ全然関係のない人の死でも。だからって、お葬式には行かないでしょ、関係ない人の葬式には。お悔やみ申し上げますがね」と言いつつた。

もうこれはどうにもならないと、私も悟った。全部なかったことにしたほうがいいのだろうと思った。それで私も葬儀に出るのをやめようとした。しかしこれはリッキーの断固たる反対で覆された。そんなことをしたら典子の魂が死ぬ、そうしたら典子は一生苦しみ続ける、生きるのがつらくなる、絶対に葬儀には出なくちゃいけない。

不機嫌きわまりない精神状態で、私は葬式に出た。体の中全体で、自分でもよくわからない感情が煮えたぎっていた。誰かに話しかけられたら、私は絶叫して暴れ出しかねなかった。

棺の中は見ないようにした。それでも最後に棺の蓋を閉めるとき、リッキーに強引に直面させられた。そして私の耳もとに、「したいことをすればいい」とささやいた。

痩せ細った顔は、穏やかだった。私はその場で、体の中でたぎる感情をすべて吐き出した。泣いたのか叫んだのか暴れたのか哄笑したのか、記憶はない。終わって出棺し、火葬し、お骨を拾うまで、自分が何をしていたのか、覚えていない。ただ、箸でリッキーと骨を拾ったとき、自分は母をもう許していることを知った。

3年たった今でも、時間は止まったかのように、私は同じ後悔を、まるで今の出来事のように味わい直させられている。眠りに就こうとすると、母の孤独が自分の心に再現され、私をさいなむ。取り返しが見つからない以上、私はこの後悔を永遠に味わい続けるのだ。

でも、許すことはできた。だから、私の心の中にやましさはない。その機会を自ら失いかけていたのに、取り戻してくれたリッキーこそが、私と母をつなぐ絆だった。私はMéxicoの力で母を失わずに済んだのだと思っている。というのも、リッキーのそんな、まるで私自身になったかのようにこちらの感情に共揺れし、手を引いてくれる態度こそが、メキシコ人によく見られる性格であり、私がメキシコにハマった理由だったのだから。

だから、しょうもない欠点もたくさんあるけれど、私はMéxicoと離れない。私もすでにMéxicoの一部だし、私の一部はMéxicoでできているのだから。

メキシコは序盤から試合を支配した。細かく動きながらパスを交換してボールをキープ。対するイタリアは、タイトなディフェンスからボールを奪うとトッティTottiにあずけ、チャンスを作り出す。トッティからのおしゃれなスルーパスにインザーギInzaghiが抜け出して決めたゴールは、オフサイドを取られた。私にはよくわからなかったので、やられた！と思ったけれど、イタリア勢が激しく抗議しているので、点にならなかつたらしいとホッとした。でも私の背後はヒートアップしていて、「ふし穴！ どこかオフサイドなんだよ。インザーギはおまえの目に見えないぐらい絶妙な、一ミリ単位でライン見きわめて飛び出してるんだよ。おまえのほうがレベル低いんだよ！」などと審判を罵っている。

その後も、何度もトッティは意表を突くプレーを連発し、惜しいシュートも放つ。そのたびに背後が、「な、今の動き見ただろ？ 右サイドにディフェンスを引きつけさせておいて、ずっと左サイドに出てフリーになってたわけよ。世界が見えてないとああいふプレーはできないわけ。イタリアのフットボールは大人なんだよね。完全にメキシコを手玉に取ってる。当たった相手が悪かったよ。後がないイタリアなんて、つまり本気のイタリアを相手にしなくちゃならないってことなんだから」云々と、蘊蓄を垂れ流す。

何でこんな背後霊に取り憑かれてなくちゃならないんだ、まったくついてない、とむしゃくしゃしていた後半30分過ぎ。ゴール前に放り込まれたクロスに向かって走っていたボルゲッティJared BORGETTIは、ぴたりとマルディーニPaolo MALDINIにマークされていたけれど、ボールの落下点に入るや、なんと体を180度ねじって後ろ向きになって飛び上がり、ヘディング。まったく逆をつかれたブッフォンGianluigi BUFFONは一步も動けなかった。

とんでもないゴラツソgolazoに、もちろんメキシコの応援席は爆発した。誰彼かまわず抱き合い、中には客席や通路をやたらとダッシュして走っている者もいる。

痛快だったのは、私の背後霊だ。しばし沈黙した後、「いやあ、すげえゴールだよ。あんなのできないよ」とつぶやき、彼女のほうが「何かメキシコ、楽しそう」と言うと、男も「だよ。俺もうすうすう思ってた。メキシコ、あながい、すごいかも」と宗旨替えを始める。

そうだろう、そうだろう、君、ようやくフットボールの真実に行き当たったね、メキシコ人と一緒になって楽しみなさい、楽になるから、メキシコ人に身をゆだねなさい、心が軽くなるから。などと、私は心の中でほくそ笑んでいた。

先制点を取ってさらに余裕を持ったメキシコは、思うようにフットボールをする。応援の盛り上がりも半端じゃない。パスをつなぐたびに「オーレ！」の大合唱がリズムを刻む。背後霊はすっかりメキシコに夢中になって、隣のメキシコ人に英語でしきりにEl Triのことを尋ねている。そして、応援に参加する。終了間際によくイタリアがデル・ピエロの渾身のヘディングで同点に追いついても、もうメキシコから離れられない。終わるころには、「すげえ楽しい！ Viva México!」と叫んでいた。きっと、スタジアムのあちこちで、かれらのようにメキシコの虜になった日本人たちがいるんだろうな。

## ★吉見大輔

2002年6月14日（金曜） 曇り

日本、準決勝進出に向けて順調に勝利。世間の楽勝ムードに不安があったが、選手はまったく左右されていなかった。実力どおりに普通に勝っていた。完勝できたのは、選手が誰一人として楽勝だとは思っていなかったからだ。トルシエ監督Philippe Troussierは1次リーグ突破という重責から解放されて異様なハイテンションだったが、選手はまだまだ続く試合の通過点として捉えているらしく、歓び方も落ち着いていて、もはや選手がトルシエを引っ張っている印象さえ持った。

チュニジアは日本に威圧されているようだった。守備的に戦うという以上に、心理的に畏れてのびのびとプレーできていない感じだった。分厚いサポーターからの攻撃にさらされるアウェイであること、梅雨の蒸し暑さに慣れていないことだけでなく、日本は強敵であると意識しすぎて萎縮しているように見えた。勝つことの効果はこういうところにも現れるのだ。

アイルランドを見てもわかるとおり、勝ってうまくいけば、その前のトラブルなど忘れ去られる。開幕直前に監督との確執で外されたロイ・キーンを見たがったり、その穴を悔やむ声など、もはや聞こえない。いまや主役はロビー・キーンとなっている。同様に、中村俊輔の落選を問題視する者はほとんどいなくなっているだろう。試合がうまくいけば、過程は正当化されるのだ。監督の采配はとても微妙なもので、成功すれば正しかったとされ、失敗すれば間違いがあったとされる。アルゼンチンでは、あれほどスリリングなフットボールを見せたビエルサ監督に対し、



やはり集中砲火が浴びせられている。バティGabriel BATISTUTAとクレスポHernan CRESPOをなぜ同時に使わなかったのか、フォーメーションのほうが選手の個性より大事だったのか、等々。けれど、絶対的な正しさなどなく、うまく行くか行かないかは紙一重で、しかし、結果次第で正義か悪かに分けられてしまう。出場した日本選手は、海外市場から見られており、移籍するしないにかかわらず評価はアップするだろうが、出場していない選手はあたりまえだが何も変わらない。この過酷さは、プロをプロたらしめている重要な要素だけど、同時にこういうことを決定的に分けてしまうボーダーラインがいつどのように形成されるのか、私はきちんと見ていきたい。結果から眺めてしまうと、そのボーダーラインは初めから存在した絶対的なもののように映り始めるからだ。そのラインが出現する歴史を忘れてはいけない。ありえた可能性の存在を、いつでも心に留めておかななくてはならない。

韓国の一次突破にもホッとした。パク・チソンPark Ji-Sungの、ディフェンダーをリフティングでかわしてのボレーシュートには度肝を抜かれた。1次リーグのベスト3ゴールに数えたい。強豪とされたポルトガルを破っての一位通過だから、相当な自信になるだろう。それが過信にならないかという不安がああチームにはあるが。しかし、きょうのポルトガルは初戦同様、強豪ではなかった。せっかくアメリカがポーランドに負けていたのに、あの大サポーターに囲まれて不安を隠せず、パスのコンビネーションはすっかり狂い、ポーランド戦での復活が冗談だったかのように縮みあがっていた。残念だけれど、ひ弱だったと言うほかない。これでは一次を突破しても期待は持てなかったから、仕方ない。

## ★キチ

決勝トーナメント2日目、俺はアイリッシュ・パブ「O'Gorman's」に、アイルランド対スペイン戦を見に行った。

例によって黄緑シャツのアイルランド人でぎっしりだったが、1次リーグでの戦いぶりに感動してアイルランド・ファンが増えたんだろう、日本人の姿も多かった。何も考えずに来た俺は、間違っただけで臍色のタイトなシャツを着てきてしまった。これではどう見ても赤のスペイン側だ。そのため、そうとう白い目で見られた。

ほとんど全員が試合前に盛り上がり、できあがって、赤い顔をしていた。だから、試合がのっけから集中力の高い撃ち合いとして始まると、たちまち店の中は熱くなった。オー、アー、ノー、などと、合唱でも聴いてる気分だった。

アイルランドはいつもどおり、ロビー・キーンを中心に、迷いのない、まっすぐでスピードのある攻撃を、これでもかこれでもかというように仕掛ける。これで試合開始直後からチャンスを量産する。

対するスペインも、持ち味のテクニクと相手の裏をつくパス回しで、アイルランドを崩していく。

先制したのは、スペインだった。まだ序盤のうちに、スローインからのボールを受けた右サイドのプジョルCarles PUYOLが、アイルランド陣内深くに切り込んでクロスを上げる。ニアに駆け込んだモリエンテスFernando MORIENTESは、アイルランドのセンターバックにつかれていたが、ヘディングの瞬間だけ競り勝って、ボールはファーポスト内側へ吸い込まれる。浮き球に強いモリエンテスらしいゴールだった。

この後も両チーム攻め続け、見ていてスリリングな試合だった。アイルランドも何度もチャンスを作り、ついには後半中ほどで、PKを獲得。ところがキッカーのイアン・ハートIan HARTEのキックは甘く、カシージャスIker CASILLASにはじかれる。こぼれ球にアイルランドのキルベインKevin KILBANEが詰めていて、普通に蹴ればゴールできたのだが、力んだのか、わざわざゴール外へクリアするようなシュート。店内にはアルコールくさいため息が充満した。

けれど、それでも諦めないのがアイルランドらしさだ。疲れを知らない走りで攻め続け、終了間際にまたしてもPKをもらう。今度はエース、ロビー・キーンRobbie KEANEがしっかりと決め、お得意の同点劇を見せてくれる。店の中はライブハウスのように絶叫が響き渡り、地震のように揺れた。俺も我を忘れてあたりの黄緑の巨漢たちとハグし合った。隣で異様に盛り上がっていた日本人の二人組ともガッチリと抱き合い、力いっぱいハイタッチをして音を響かせ、拳をぶつけ合った。

延長に入ると、スペインは負傷で一人欠いて10人での戦いとなったが、アイルランドは決めきれず、逆にスペインに何度もミドルでゴールを脅かされるが、最終的にはPK戦へ。

これもすんなりとはいかなかった。やはりキーパー力の差が出て、カシージャスの前にアイルランドは3人が失敗するが、スペインもこれを決めれば決定というところで、二人が続けて外す。結局、最後のメンディエタGaizka MENDIETAの成功で、スペインが勝ち抜けた。

店内は空気の抜けた風船のようになったが、それでも内容の濃い試合に、充実した気分はあった。アイルランド人たちは涙ぐみながら国歌を歌っていて、代表を誇りに思う気持ちに俺もほろっときた。誇りに思える代表を持っていることが、本当に羨ましかった。でも少し、反発も感じた。そこに入れない者のことなんか頭にないんだろう、と苦々しく思った。しかし、一人のおじさんが涙をぬぐいながら俺をハグしてきて、何かを言って、エールを奢ってくれたのには、また感動した。隣にいた二人組が、「ここにいると、俺らもアイルランド・サポとして認めてくれるよね。アイリッシュ、最高だよ」と言って、乾杯してきた。おじさんと四人で乾杯をした。

おじさんは酔いつぶれて寝てしまい、俺たちは3人で話をした。何でアイルランドを応援しにここへ来ることになったのか、その経緯をお互いに語っていて、驚いた。俺たちは一度、ここで会っていたのだ。最初に俺がここに来たとき、酔いつぶれた若禿げをタクシーに乗せてやったが、あのときの運転手だったのだ。穰治のほうも、あの若禿げを乗せたのが、アイルランド・ファンになるきっかけだったという。

「すげえ偶然だな」ともう一方の林田というやつが言うから、俺は「違うな、偶然じゃない」と言った。「ワールドカップがあって、いつもと違う開放的な気持ちになって、そこにアイルランドの魂のフットボールと出逢った。そうしたら俺たちの中に化学変化が起こって、いつもだったら取らないような行動を取ってる。積極的にアイルランドの中に飛び込んでいこうとしたわけだ。素直にアイルランドに誘惑されたから、2度も出くわすんだよ。それがアイルランド・フットボールの引力ってことだろ」

二人はうなずいた。しばらく話しているうち、穰治が「明日、日本がトルコに負けても、もうがっかりしないな」と言った。「だって、アイルランドに託したような切実さはないから」

林田が、「じゃあさ、俺たちでアイルランドみたいなチーム作らない？ 誰でも引力に吸い寄せられて集まっちゃうようなチーム」と言い出した。

「11人じゃ集めるのたいへんだから、フットサルにしたほうがよくない？」と俺が提案する。自分で口にしたとたん、俺はボールを蹴りたくて仕方ないのだということに気づく。ミニゲームをしているイメージが浮かび、それ以外、もう何も考えられない。

「いいね、ここにいるアイルランド人も誘おう」穰治が言う。

「難しいんじゃない？ もう負けたから、みんな帰国だろ」と俺が言うと、「そうかもしれないけど、日本に住んでるアイルランド人だっているかもしれないから勧誘しよう」と林田は前向きだ。

日程は、決勝前のブレイク期間中の土曜日に決まった。つまり決勝前日だ。俺はどうせ暇なので、コートを探す役を引き受けた。ボールを蹴るとなると、10年ぶりだ。俺はもう興奮してきて、あと2週間近く、眠れないかもしれない、と思った。

### ★穰治

実際のところ、冴えない試合だった。本当にワールドカップ？と問いたくなるような、熱気も何もない凡戦だった。だから、負けてもガッカリしようがない。まるで練習試合みたいだったのだから。

いや、本当に練習試合だった。だってトルシエ監督は、今までやったこともないフォーメンションとスタメンで、トルコ戦に臨んだのだから。誰もが、その布陣にきょとんとした。なぜ、フォワードに今大会一度も出場していない西澤を起用して、しかもワントップなのか？

事実、試合が始まっても、日本はグループリーグのときのような連動したフットボールを見せられなかった。あたりまえだ、まったく初めての布陣でプレーするのだから、連携が取れるはずがない。

トルコは、ホームの日本相手に慎重になっていたが、そのぶん、危なげなかった。試合開始早々にコーナーキックをヘディングで合わせて得点すると、ひたすら省エネ、無理をしない無難なフットボールに終始した。日本の攻撃が牙を抜かれて怖くないのだから、楽だっただろう。

そうして、日本の快進撃もあっけなく終わってしまった。トルコに実力でねじ伏せられたというより、トルシエ監督のわけのわからない采配で、強制終了させられたという感じだ。これ以上勝てっこないと思ったトルシエは、今まで使わなかった選手にワールドカップを体験させてやろうとでも思ったのか？ 勝つ気なんてなかったんじゃないのか？

それは、その数時間後に行われた、韓国対イタリアの試合のおかげで、より一層はっきりしてしまった。韓国は狂気を帯びているとでもいいたいくなるような声援と闘志で、イタリアを延長の末、逆転で破ってしまったのだから。

ぼくはその試合を、林田と一緒に新大久保の韓国料理屋で見ている。その前の日本対トルコ戦は、林田のアパートで見た。林田は、ぼく以外の誰とも日本戦を一緒には見たくない、と言って、パブリックビューイングはもちろん、スポーツバーなんかにも行きたがらない。

ぼくは林田に気を使って、もっとはっきり言えば、腫れ物に触るように扱って、あまり話しかけなかった。自然にするのも不自然だし、不必要に日本代表の話をすれば林田はキレるかもしれない。林田も何を言っているかわからないのだろう、言葉少なで、ぼくたちは会話をほとんどせずにトルコ戦を見た。

あらゆる面で盛り上がる要素は皆無だったから、終わったときも、「ま、こんなもんか」と林田がつぶやき、ぼくがうなずくだけだった。日本代表が負けて林田がニヤニヤする、なんてことはまったくなかった。ぼくと同様、残念だっただろう。こんなクソみたいな試合しやがって、バカじゃないの、と軽い軽蔑と怒りとシラケを感じていただろう。

それから新大久保に移動し、店にいた人たちと日本戦の話も少しし、韓国戦が始まった。

スタジアムはまたしても赤一色、呪術的とでも言いたくなるような熱狂に満ちている。

試合開始からほどなく、いきなり韓国は絶好機を得る。イタリアのペナルティエリア内で、パヌッチがソル・ギヒョンのユニフォームをつかんで倒したとされたのだ。え、これでPK？ と思わないでもなかったが、まあファウルはファウルだ。

けれど、これをエースフォワード、アン・ジョンファンがブッフオンのスーパーセーブにあって失敗する。

前半15分過ぎ、コーナーキックからのボールをヴィエリVieriがヘディングで決めてイタリア先制。その後も、激しい気迫で両チームはチャンスを作り出すが、決めきれない。まるで昨日のイルランド対スペイン戦のように、チャンスとピンチがめまぐるしく現れ、ぼくたち店の客も歓声を上げたり、悲鳴を上げたり、忙しい。

そして試合終了間際。ゴール前に上がった浮き球のパスを、パヌッチがクリアミス、すかさずソル・ギヒョンSeol Ki-Hyeonが蹴り込んで、土壇場で追いつく。スタジアムも店の中も揺れ動き、テレビが壊れるかと思ったほどだ。

延長戦はVゴール方式で、どちらかが点を入れた時点で試合終了なので、これまでも増して緊張感が漂う。

ここで事件は起きた。トッティがペナルティエリア内で倒されたのが、シミュレーションを取られ、二枚目のイエローカードが出され、退場となってしまうのだ。正直なところ、ぼくにはどちらかわからなかった。それほど微妙なものならば、ここで退場にすべきだろうか、と思った。

10人になったイタリアは、それでもカウンターから決定機を作り出す。ヴィエリがゴール前にスルーパス、走り込んできたトンマーゾTOMMASIはキーパーと一対一になる。が、これもオフサイド。スローが映ったが、明らかにオフサイドじゃない。ほぼ得点確実だったから、イタリアは納得いかない。

立て続けに、首をかしげたくなるような判定が相次ぎ、ぼくは何となくこの試合に乗れなくなってしまった。

PK戦突入かと思われたところで、韓国は、左サイドから斜めに入ったクロスに、アン・ジョンファンAhn Jung-Hwanが頭で合わせてゴール！ アメリカ戦での同点ゴールとそっくりなゴール。韓国はイタリアを破り、応援している人たちは、壊れてしまったのかと思うような喜びようだ。

ぼくも、内心の積然としない気分を隠すために、はしゃいで見せた。こんな場で静かにしていたら、まるで韓国が勝って残念がっているように思われてしまう。応援していたはずなのに、アウェイにいる気分だった。

そんなことはない。この死闘をモノにした韓国の戦いぶり、スタジアムの熱い声援には、胸を打たれた。にもかかわらず、あの怪しい判定が、ぼくの喜びを奪ってしまった。

林田はというと、派手ではないけれど静かに満足げな笑みを浮かべている。その目は、興奮を表している。林田にぼくの胸の内をわかってもらうことは難しそうだ。ぼくはただ林田の喜びを壊さないでいるのが精いっぱいだった。

★吉見大輔

2002年6月21日（金曜） 快晴

ブラジルーイングランド戦は、実に大味な試合だった。まあ、反イングランドの私としては爽快だったが。何しろ、イングランドがほとんどまともなフットボールをできないチームであることがはっきりした敗北だったからだ。

きょうも先取点を、ブラジルCBルシオLucioのミスからオーウェンOwenが奪った。イングランドはこれで3試合連続で相手のポカから先取点を取ったことになるから、運はあるチームだったといえる。問題はその後、追加点はおるか、これまでの試合のようにながっちり固めた守備でその先取点を守りきれなかったことだ。暑さもあってか最初からブラジルは慎重で、私には堅いイングランド・ディフェンスを最も楽に破れるカウンター狙いのように思えた。実際、同点弾はカウンター攻撃によるものだった。ロナウドRonaldinhoは試合開始からキレていたが、あの高速フェイントにはたまげた。さらに後半、これまたRonaldinhoの仰天もののフリーキックで逆転されると、イングランドは積極的な反撃を余儀なくされる。しかし、Ronaldinhoの退場で一人減ったがゆえに今大会初めてまともにディフェンスをしたブラジルを崩すことはできない。暑さによる疲労もあっただろうが、あっぱれなまでに凡庸で、退屈で、ひらめきと想像力を欠き、迫力のない攻撃を繰り返して負けた。

とはいえ、キーパー以外誰も守備をせず、ほとんど個人技だけでここまで進んでいるブラジルも、この先勝ち進む資格があるのかどうか。勝手に先取点を与え、サーカスみたいな技で2点を連取するや当人は疾風のごとく退場してまたピンチなんて、呆れるほどの独り相撲とも言える。まあ、このハチャメチャさ、気まぐれこそが、古きよきブラジルなのかもしれないが。その意味では、超現代的なフットボールが次々敗退し、レベルの低下した今大会は、優雅で驚異的で懐古趣味なブラジルの優勝するチャンスかもしれない。

## 緑のシャツ Camisetas Verdes

### 第4回

#### ★穰治

何と韓国がベスト4に入った！

夜勤明けだったので、昼間に行われた韓国対スペイン戦は、ぼくのアパートで生中継で見ることができた。

そしてさらに複雑な気分になった。スペインはどう見ても確実なゴールを取り消された。ゴールライン上からホアキンJoaquínの上げたクロスは、完全にインラインだった。見間違えるような微妙なものじゃない。素人目にもわかる。

他にも、フリーキックからのゴールが、ファウルがあったとして取り消された。素人のぼくにはわからないのだろうと思っていただけ、その後も、何がファウルだったのか、誰も説明していない。決定的なチャンスが、微妙なオフサイド認定で取り消されたりもした。

スペインは韓国を圧倒していて、韓国のチャンスはとても少なかったけれど、結果は引き分け、PK戦で消えた。スペインに思い入れはないが、こうやって明らかに劣勢のチームが判定にも助けられて勝ち進むのは、ワールドカップのレベルが下がるという意味で、よくないんじゃないか。

けれども、そんな内心は隠して、林田には「やったね！」と韓国のベスト4を祝うメールを出した。すぐに、力こぶマークのアイコンが帰ってきた。

翌日、出社したら林田と顔を合わせたので、ぼくはニヤニヤしながら林田の肩を小突いた。そしてハイタッチをしようと手のひらを垂直に立てた。

けれど林田は無視して通りすぎた。ぼくもちょっとムカッと来たけれど、何か異様なものを感じて、追及するのは思いとどまった。

仕事を終えて帰り支度をしていると、上司から「前に頼んでおいたチャーターのマイクロバスの運転、26日の夜になったから」と言われた。埼玉スタジアムで行われる準決勝のために、観戦ツアー客の送迎をするのだ。つまり、試合会場を目の前にしながら、リアルタイムでの中継は見られないってことか。仕事なので仕方ないけど。

会社を出ようとしたとき、また林田と顔を合わせた。今度は林田の服をつかんで、「はっきり言ってくれよ。感じ悪いよ。ぼくにも黙っていたいのか」と追及した。林田は不機嫌そうにうつむき、少し黙っていたが、「メシ食うか」と言った。

まずビールをあおってから、「で？」と林田を促す。

「穰治はネットとか見てないの？」と聞いてくる。ぼくは首を振る。

「まあ、そのほうがいいよ。俺はもうワールドカップなんか見たくない」林田は次第に消え入りそうな声でつぶやく。

「ネットなんか気にするなよ」

「わかってるよ。でも心が言うことを聞いてくれないんだ」

林田が言うには、「つけあがるな、不正大国」「八百長で4強を買った民族」「世界の鼻つまみ者」等々、韓国への誹謗中傷が急増しているのだそうだ。加えて、「在日さん、これで満足ですか」といった、在日を叩く言葉まで現れている。

「もしこれが逆で、韓国が決勝トーナメント初戦で負けて、日本が勝ち進んだら、俺は日本の勝利を願い続けるよ。在日みんながそうだとはいわないけど、生まれ育った国の代表なら、自分たちの代表だって意識、本当はあるよ。在日の日本代表選手だっているんだし。なのに、何でこんな決めつけ方されるんだ？」

ぼくは何も言えなかった。なぜなら、ぼくが批判されているように感じたからだ。誤審を含んだ勝利に釈然とせず、心から喜べなかったぼくのことを、名指ししているように聞こえたからだ。

「悔しいのはわかるよ。強烈なライバルなんだから。でも、だからって、あんな卑しい言い方して、自分が惨めにならないのかね。こうなったら、両方応援すればいいやって、どうして思えないんだ？」

ぼくは意を決して、「特にスペイン戦だけど、誤審があったとは思わない？」と尋ねた。林田はうんざりしたように溜息をつき、「あったと思うに決まってるでしょ」と言った。

「俺だって、試合の行方が左右されるような誤審は、楽しくないよ。おかげで勝利の価値が減ったし、こんなこと言われまくるし、いいことない。でも韓国のすさまじい応援を見てると、あれが殺人的なホームのアドバンテージなんだな、ってことも感じる。日本のJリーグだと、ホームもアウェイも危険度に差はないけど、イタリアとかアルゼンチンとか、すげえもん。アウェイでは殺されるんじゃないかって恐怖を覚えながら試合してると思う。実際、あからさまにホームに有利な笛が吹かれるしね。それがいいことだとは思わないよ。俺が言いたいのは、そういうことはフットボールにはあることであって、特にヨーロッパや中南米のチームはそれをよく知ってるはずでしょ、ってこと。どうして朝鮮民族だけ、特別に悪者になって、異常であるかのように言われるんだ？ それはおまえら日本人がフットボール知らないだけだろ、って俺は言いたいんだよ」

林田はつい激して言うてから、しまったという顔をして口をつぐんだ。林田としても、ぼくを批判するつもりはないのだ。

「ブラジルとか、いいよね。ブラジル人って、大半は移民でできあがってるんだろ。きっと、ルーツとか関係なく、自分たちの代表だって思えるんだろうな。俺もどこかそんな国にでも移民したいよ」

「メキシコとかもそうかも」とぼくは典子さんを思い浮かべながら、あたりさわりのない受け方をした。「それとも、ネイティブのブラジル人、アマゾンとかの先住民なんかは、自分たちはあのブラジル代表からは排除されてるって、思ってるのかな」

「たんにフットボールに興味ないんじゃない？」

「知らないくせに勝手なこと言ってるよね、俺たち。そうやって勝手なこと言っ、言われた側は孤独な思いをするんだ」

「だからさ、あのキチだっけ？ アイリッシュ・パブで会ったやつ。あいつとかとフットサルするんじゃない！」

「そうだった。もういいんだ。アイルランドは負けたし。ワールドカップは終わり。そんなの関係なく、フットサルしよう」

「そうそう」

そうは言ったものの、ぼくは決勝までワールドカップを見届けるつもりだった。今さら見るのをやめるなんて、できるはずがなかった。

2002年6月24日（月曜） 曇り

私の周囲で、韓国の勝利を歓迎しない人が増えている。イタリアを破った段階で嫉妬し「不愉快だ」と言う人もいれば、一歩引きながら「それも面白いんじゃない？」という態度で見ていたのに、決勝進出までもが現実に迫ってくると「もうそろそろいいでしょう」と本音が出てくる人もいる。もちろん、「こうなったら優勝を」と本気で応援している人もいるが、割合としては少数派だ。

私自身はどちらとも言えない。ドイツよりは韓国に勝ってほしいが、ブラジルが決勝に進んだならブラジルに優勝してほしい。韓国―トルコなら、韓国を応援すると思う。が、いずれもあまり思い入れはない。

もしかしたらこういう態度が一番、日本的でよくないのかもしれない。韓国を本気で応援するか、本気で嫉妬して「負ける」と願うか、どちらかのほうが韓国とつきあうためにはいいような気がする。嫉妬して、韓国からムキになって学ぶのも、日本や韓国のフットボールのためになるだろう。

決勝に進出したら、はたしてどれだけの韓国支持者が横浜国際競技場を埋めるだろうか？ 韓国からのサポーター以外に、どれだけの日本人観客が韓国の応援に回るだろうか？ 赤を着ていくだろうか？ 私だったら、赤を着て心の中ではブラジルを応援する。

#### ★典子

決勝トーナメントに入ってから、ブラジルを追っかけているアンゴラ人Angolaの6人組をガイドしている。アンゴラはポルトガル語で、私はポルトガル語はできないというのに、ポルトガル語の通訳ガイドが不足しているため、スペイン語の人たちも駆り出されている。一人、スペイン語も何とかできる客がいるので、その人を通じてやりとりしているけれど、しょっちゅう行き違いがあつて疲れる。おまけに、いちいち、日本の待遇は悪い、韓国のほうがよかったと文句を言うのには閉口する。ブラジルは1次リーグを韓国で戦ったため、このアンゴラ人たちも韓国で観戦していたわけだけど、韓国だとバスはスタジアムの入り口まで行くし、買い物を頼めばしてくれるし、ちょっと歓楽にひたりたいと思えば手配してくれる、と言う。どこまで本当かわからないが、もしかしたら韓国でも同じように文句を言っていたかもしれない。

決勝ラウンドになるとチケット代も高くなるので、外国からのお客さんは裕福な人ばかりになるのだ。特に貧富の差が激しい途上国だと、そんな人しか観戦できない。金持ちには、ワガママが通ると思っている人が多かたりするが、途上国の金持ちはそのワガママの度合いがエスカレートする傾向がある。

ブラジルは決勝トーナメントでベルギー、イングランドを撃破し、今日はトルコ戦。1次リーグでも戦った相手だ。「日本が負けた雪辱をブラジルが果たしてくれるよ」とアンゴラ人たちは言うが、私は日本は自滅したと思っているから、雪辱も何もない。そもそも私には、日本よりメキシコのほうがずっと大事で、メキシコがアメリカに負けた時点で興味の大半は失せた。



しかし、いきなりトラブル発生。ホテルのロビーで待っていると、スペイン語のできるリーダー、Miltonが、Blancaが高熱を出して寝込んでいるという。

言わんこっちゃない。BlancaとMarisaは毎晩、六本木あたりに繰り出して朝まで遊んで、戻ってきてほんの2、3時間寝てから、ツアーの観光に参加していた。そんな生活していると身がもたないですよ、もう若くないんだから年齢を考えて（2人はおそらく40歳前後）、とそれとなく注意しておいたのだが、聞く耳など持たない。Marisaはロビーに降りてきたものの、疲労で虚ろな顔をしている。

疲れ以外の何ものでもないだろうと思ったものの、念のためホテルに医師の手配をお願いして、通訳のバイトを寄越すようツアー会社に頼んで、私は残りの5人をマイクロバスに押し込む。

ようやく出発してぼんやりしていると、「岸川典子さんですよ？」と運転手が呼びかけてくる。「はい、そうですけど？」

何かまた問題か、と警戒する心が、私の顔を陰しくしていただろう。運転手は「ぼく、穰治です、青山穰治」と、「My name is Bond. James Bond.」みたいな言い方をして、私をなごませ、「3週間前に、メキシコ人ツアーのアテンドで新潟へ行くっていうとき、ぼくのタクシーにお乗せしました。あのときの運転手です。いつもはぼく、タクシーを運転してるんです」と説明した。

あまりにあわたましい毎日なので、3週間前と言われても最初は何を言っているのかわからなかったが、「ほら、アイルランドの話、したじゃないですか」と言われて思い出した。

「ああ、アイルランド人のお客さんの話をしていた運転手さん」

「そうです、そうです、穰治と呼んでください。いやあ、まさかこんな形で再会するとはねえ」

「すごい偶然ですね」

「偶然じゃないんですよ。ワールドカップのときはこういうことがしょっちゅう起こるんですよ。今はメキシコ人じゃなくて、他のツアーをガイドされてるんですか」

「メキシコはアメリカに負けちゃいましたからね。この方たちはアンゴラからで、ブラジルを追っかけてるんですよ」

「アンゴラ！」

「そう言われても、どこだか、わかりませんよね。アフリカの中央部の国です。一時期、ポルトガルの植民地だったんで、まあ、ブラジルに親近感があるんですよ」

「なるほど」そう言ったきり、穰治さんは黙って何かを考えているふうだった。しばらくしてから、「植民地だった国の人は、その支配してた国に対して、親近感って抱くんでしょかね」と尋ねてきた。

「うーん、場合によるでしょうね。例えば、メキシコは200年前にはスペインの植民地でしたけど、今はそれほど意識してない感じですよ。好きでも嫌いでもないというか。それよりも、すぐ隣で強い影響力を振るってくる横暴なアメリカを、ものすごく嫌ってます。だからこそ、ワールドカップでは勝ってほしかったんですけど、アメリカには勝たないって意識したら、ビビってしまって、あっさり負けちゃった。お調子者だから、いいときはすごい能力発揮するのに、ビビるとすぐに萎縮しちゃうんですよ。アメリカのことは嫌ってるくせに、怯えてて、憧れもあるんですよ。コカコーラ大好きだし。そのへんはすごく複雑です」

「そうか、距離も関係あるんですかね。隣だと、愛憎が強くなるっていうか」

「影響及ぼし合いますからね。距離の離れてる国みたいに、淡々とつきあうってことは難しいですよ」

「すごく参考になりました」

「はあ、さては穰治さん、韓国のことを考えているな、と私は推察した。韓国がベスト4になって以来、私のまわりでも急に韓国嫌いが増えたから。」

「やっぱり近くの国はムカつきますか？」と私は鎌をかけてみた。

「いや、どうして素直になれないのかなって思って」

穰治さんの返事は、解釈によって意味が正反対に変わるものだったが、私は自分に都合のよいように受け取ることにした。たぶん、それで間違っていない気がした。そして穰治さんに好感を抱いた。

「あ、そうだ！ 穰治さん、埼玉スタジアムに着いたら、終わるまで待機ですよ？ ほかにご用事はありますか？」

「いえ、ただ待つだけですけど」

「それじゃあ、一緒に試合を観戦しませんか？ お客さんの一人が病気で寝込んでしまって、チケットが一枚余ってるんです。何と、プラチナ席なんです。いかがですか？」

「ええええ！ いいんですか？ ダメでしょう、運転手なんか」

穰治さんがあまりに絶叫するので、お客さんが何事かという顔で私を見た。

「いいですよ、だって誰かが見なかったら、たんに空席になるだけなんです。準決勝のこんな好カードが空席だなんて、そんなことがあっていいと思いますか？」

「思いません！ 行きます！ ありがとうございます！」

私はお客さんに事情を説明した。裕福なかれらはこういうところは鷹揚で、何の文句もなくOKしてくれた。ケチくさい人だと、「彼もしかるべき代金を払うべきだ、さもないと大金を出した私たちに不公平だ」などと言ってきたりする。

スタジアムに入ると、穰治さんはできないめちやくちな英語で「Call me George.」などと、どんだんアンゴラ人たちに話しかけていて、感心した。アイルランド人に鍛えられたのかもしれない。

今大会屈指の好ゲームが終わったあと、穰治さんからは、私が神であるかのように感謝された。瞳孔が開ききって黒く濡れた瞳になっていて、まるで薬物中毒患者みたいに挙動不審で、大丈夫だろうかと心配になるほどだった。

「お礼ってわけじゃないんですけど、ワールドカップでの縁は偶然じゃなくて、必然だってぼくは思ってるんです。それで、そう感じる人たちで集まって、今度フットサルするんですよ。よかったらいらっしやいませんか？」

「夫と息子付きでもいい？ メキシコ人だけど」

「ナイスですよ、それ！」

**2002年6月26日（水曜） 雨**

梅雨寒の日が続いている。

しかし、強い！ ぶっ飛んだ。度肝を抜かれた。このブラジル、これは本物だ。この大会で初めて強豪の超一流のフットボールを目にした。準決勝2試合目にしてやっと、ワールドカップだという充実感を味わえた。この驚きこそがワールドカップだ。

私はブラジルをまだまだわかっていなかった。畏怖が足りなかった。フットボールにおいては底知れぬ奥深さを備えた国なのだとすることを思い知らされた。ブラジルとはフットボールそのもの、と言い換えてもよい。つい2試合前まで、攻撃の破壊力はすごいが、誰もディフェン

スをしなない粗雑なチームだったのに、イングランド戦で初めてディフェンスを覚えるや、きょうの試合では攻守にわたって完璧なチームに変貌してしまった。ハーフウェイライン上でロナウド Ronaldoまでがディフェンスをしていたのには、仰天した。しかも、やらせてみるとみんな上手い！ 読みの鋭さ、チェックのスピードのみならず、何だかわからないが奇妙な足技で球を奪ってしまう。奪ったとたんのカウンターも速いこと！ どう攻撃が組み立てられているのか理解をしようとしている間に、みんな向こうへ行っている。そして、Ronaldoのあのゴール。私は一瞬、我を忘れて自分がどこにいるのかわらなくなかった。Ronaldoは異次元のタイミングで、シュートを撃った。この世の物理法則を無視した瞬間に撃たれては、誰も反応できない。やはりRonaldoとZidaneだけは別の存在だ。正直なところ、きょうのブラジルのフットボールは私の理解を大きく超えていて、どうしてそうなるのかわからないことだらけだ。

トルコはいいチームだけど、私たちの理解の範囲内であり、強靱な軟体動物のようなブラジルを前になすすべもなかった。攻めても攻めても、ペナルティエリア内に進入することはできない。こういうのを組織的と言っていいのだろうか？ それとも、組織なきトータルフットボール？ 有機体？

印象でしかないが、この滅茶苦茶なチームは、私の知る限り（ジーコZicoらのいた1986年から前回のザガロZagallos監督のチームまで）、最も破壊力があり、最も破天荒なブラジルではないだろうか。今大会、私は北ヨーロッパ型の愚鈍で幻想を欠いたフットボールに苦しめられてきたのに、最後にその対極にある奔放すぎるトータルフットボールと出逢おうとは。私はもう夢中である。

## ★キチ

ものすごく久しぶりにポルトガル語を使った。穰治と林田が言い出したフットサルに、ブラジル人が2人、来ていたのだ。スペイン語通訳の典子さんが、友だちのポルトガル語通訳の佐藤さんに声をかけ、その通訳が、自分のアテンドしているワールドカップ観戦の客を誘ったというわけだ。

コートに出て、思いっきりサンパウロの言葉が聞こえたとき、俺は心臓がバクバクした。顔がカッと火照った。そして気がついたら、そいつらに声をかけて話していた。穰治も林田も、俺が日系ブラジル人だなんて知らなかったから、驚いただろう。何しろ、最も驚いたのは俺自身なんだから。

最近では親父とも話していないし、何年ぶりだったのだろうか。それでも言葉はスラスラと出てきた。むしろ、口から飛び出るのを長いこと待っていたかのようだった。

話している間も、ハモンRamonとジェルミーニョGerminhoはリフティングを始める。俺も話しながら、そのボールを受けてリフティングで返す。言葉でしゃべっているのに、まるでボールで会話している気分だった。それほど、俺たち3人のおしゃべりとリフティングは自然だった。

それが通じたのだろう、みんなが集まって俺らを見ていた。

俺はクラブでよく顔を合わせる、わりと気の合うカズとヒデに声をかけた。初心者でもOKだからと言って誘ったら、「マジ、挑発？ 俺もヒデも、毎週サルしてんだけど」と返された。俺は知らなかったが、2人とも浦和レッズのコアなサポで、試合の日にはフットサルをして士気を高めてから、応援に乗り込むんだそうだ。

あの日にアイリッシュ・パブでスカウトした、日本に住んでいるアイルランド人のリアムLiamも、黄緑のシャツを着て走っている。林田は、男1人、女2人の友だちを連れてきた。穰治は一人なので、

「友だちいないのかよ」とからかったら、「こういう感覚を共有できる友だちがいたら、ぼくは今日、ここにはいない」とマジになって答えた。それは同感で、俺は軽はずみにカズとヒデを誘っちゃまったんじゃないかと、少し不安になった。

けれど、結果的にこれが穰治の運命を変えるのである。

典子さんのだんなさんのリッキーリッキーと息子の陸も入れて、全部で14人。最初はカズとヒデがコーチとなって、初心者にフットサルのルールやボールの蹴り方を教えた。それから3チームに分かれて対戦。俺らブラジル人3人はバラけた。

カズもヒデも、俺が思っていたのと違って、初心者の扱いに長けていた。13歳の陸にシュートを打てば入るような、優しいボールを配給してあげる。それにつられたのか、ハモンとジェルミーニョもときおり度肝を抜くようなトリッキーなプレーを見せつつ、他の人たちがゴールできるようお膳立てしている。リアムは下手くそなのに、初心者がピンチに陥っていると必ず助けるので、gentlemanと呼ばれていた。

一人、俺だけが久しぶりのフットサルにとち狂って、独りよがりなプレーやシュートを連発した。それで俺のチームだけ勝てなかった。

しょうがねえなと苦笑して、ジェルミーニョのチームにいたカズが俺とチームを替わった。そのとたん、カズの入ったチームは勝利した。一方、俺はジェルミーニョのお膳立てでいくつかゴールを決めると、急に自分が恥ずかしくなった。

何度か組替えをし、最後に穰治が、「じゃあ、キチの希望で、1回だけ、ブラジル・アイルランド連合対レッズ&在日スターズで対戦します」と言った。俺の希望って何だよ、と思ったが、事実なので黙っていた。

こちらのチームは俺にハモン、ジェルミーニョ、リアムそして佐藤さん。あちらは、カズ、ヒデ、林田とその友だちの金くんKim、穰治。

いい勝負だった。すっかり調子に乗った俺は、ハモン、ジェルミーニョと相手の虚を衝くようなワンツーを繰り返して、面白いようにシュートした。けれど、リアムの体を張ったディフェンスにことごとくはじき返される。相手チームは、もう2時間もやってるのにまだこんな走れるのかよ、という運動量で、ボールを奪うと速攻を仕掛けてくる。そしてヒデと金くんを決められてしまった。

うちのチームはハモンの信じがたいヒールでのループシュートで一点を返すと、終了間際にジェルミーニョからリアムの股抜きパスに反応した俺が、キックフェイントで林田の股を開けると、その間を、トルコ戦で見せたロナウドばりのトーキックでぶち抜いて同点。

引き分けで落ち着くところに落ち着いたかな、と思ったところで、キーパーをしていたハモンが足技で穰治を交わそうとしたのを、穰治は粘って奪い返し、中途半端に転がったボールに体ごとスライディングして行って決勝点を決めた。フットサル初体験だった穰治の、初ゴールだった。

「That's Irland's soul!」と穰治が叫びながら胸を叩くと、リアムが狂喜して穰治にのしかかり、押しつぶした。

終わってからみんなで居酒屋に行く。サラリーマンだらけの普通の居酒屋に、ハモンとジェルミーニョは大喜びだった。俺は最初、典子さん一家の隣に座り、しゃべる。ビールが回るにつれ、次第に腹を割って話し始める。何だか俺の気分が軽くなっていて、俺はそうなるのが当然だったように、典子さんとリカルドRicardoに、日系人として日本に存在している気がしなかった10年間の気分を話していた。誰にも話したことのなかったこの胸の内を、俺は大した決意も重さもなく、ワールドカッ

プの話題の一つのように気軽に話している。そして、そのことに俺はまったく違和感を覚えていない。

2人は、「それは全然人ごとじゃないよね。だって陸だって混血の、メキシコ系日本人だから」と言った。言われるまで、俺はそのことを意識していなかった。ダメだなあ、俺、と反省したが、それ以上に、気づかないぐらい、今日はそういうことが普通だったんだ、と思い至った。俺を爆発的な歓喜が襲った。

「陸と俺はおんなじだってよ」俺は陸に言った。

「俺はキチみたいに自己チューじゃないよ」と陸は言い返した。

「よし、決めた。陸とメキシコに住む。それで陸が選ばばいい」典子さんは説明もなくいきなり言ったので、俺には話が見えない。

「俺、やだよ」陸が反抗的に言う。

「こないだは行きたいって言ってたでしょ」

「陸、カノジョいるんだろ？ だから行きたくないんだろ」俺はからかった。

「いたって、俺が行きたいときは行く。行きたくなければ行かない。カノジョは関係ない」

「何、硬派気取ってんだよ、優男のくせに」

「うるせえよ、元不良」

「早くメキシコ行っちまえ」

「キチこそ、ブラジル帰れ」

俺はこいつの気持ちならわかると思った。俺がわかるって思っていることが、俺がここで生きてきたことの意味のような気がした。

「メキシコ住んだら、俺、遊び行きますよ。カネないけど」と俺は典子さんに言った。典子さんも「うちもないけどね。それが問題よねー」と笑った。

そのあと、俺はハモンとジェルミーニョと佐藤さんとで、サンパウロの現在だとかブラジルのフットボールだとかの話で盛り上がった。佐藤さんはパルメイラスPalmeiras、ジェルミーニョはサンパウロSão Paulo、ハモンはサントスSantosのファンであり、コリンチアーノColinthianoの俺とでしばらくクラブ愛のぶつけ合いになった。

トイレから戻って他の席に回ると、穰治はヒデと熱く語り合っている。俺の姿を見て、「キチ、ぼくは決意した。今シーズンは浦和レッズに賭けてみる」と言った。

「あらら、布教されちゃったのかよ。うっかり信者になると、あとで痛い目に遭うよ。怪しいものにカネつぎ込むなよ」

「るせえんだよ。信仰のない者は救われねえ。痛みはいつか、救われるときのためにあるんだ」とヒデは言った。目が据わっていたので、俺は反論しないでおいた。

「あいつ、あのジェルミーニョって、仕事全部投げだして、貯金はたいて、借金までして、ブラジル応援しに来たんだって。何で、すべてをつぎ込んでまで来たかっていうと、愛するサンパウロの若きエース、カカーKakáっていう選手がセレソンに選ばれたからだって。そんな選手、知ってる？ 試合に出てないよね？ それでもいいんだって。だからいつも応援のときは、サンパウロのユニフォームを着てから、その上にカナリア軍団Canarinhosのシャツを着てるんだと。めちゃくちゃ羨ましい。日本とは歴史が違って、そればかりは手に入らない。そう言ったら、ジェルミーニョは、自分で作るんだ、今、日本は歴史を作ってる最中だ、そんな現場にいられるなんて、そっちのほうが羨

ましいよ、と言り返された。それでぼくはその歴史作りに参加しようって決めたんだ。それが浦和レッズになったのは、たまたま今日、ヒデたちと知り合ったからだけど、これは運命だよな？」

「赤い神のお導きだ」とヒデは言った。

かれらの横では、林田がテーブルに突っ伏して泣いている。

「どしたの、こいつ？」と俺が聞くと、金くんが「いや、もう、勝手に自分に感激しちゃってて」と呆れている。一緒に来ていたアキちゃんは「もうめんどくて」と言いながら、愛おしそうな目で見ています。

「キチ、おまえもカミングアウトしたから、俺もする。俺はもう、本名でいく。今日からイム・ヨンウって呼んでくれ。イムでもヨンウでもいい」

「何言ってるの？ 俺、カミングアウトなんてしてねえし」

アキちゃんの友だちのソユンが、どういうことかを説明してくれた。

「俺にもペドロPedroっていう名前があるけど、それを使うようなもんだな」

「違う、ちょっと違う！」

否定しながら、林田は俺に抱きついてきた。そしてまた泣く。「俺、偉い」とうめきながら。

「おお、イムは偉いよ」と俺は言った。

イムは目を丸くして俺を見て、「おい、初めてだ、俺、そう呼ばれたの。キチは俺がイムだって知ってたのか」と言い、また泣く。こいつ、バカ？ と俺は声に出さずに口だけでアキちゃんに言った。アキちゃんとソユンと金くんは深くうなずいた。

みんないろいろな決意を持っていたが、俺も決めたことがある。フットサルを本格的にやってみたい。俺がどこまでできるのか、行けるところまで行ってみたい。初めて俺が自分に誇りを感じ、人生を賭けてみたいと思ったことなのだから、余計なこと考えずに突き進んでみよう。

## ★吉見大輔

2002年6月29日（土曜） 雨

ワールドカップの最中に、イランで地震が起こり、多数の死者が出た。私が思い出したのは、イランの映画監督アッバス・キアロスタミAbbas Kiarostamiの映画『そして人生は続くLife, and Nothing More...』で、地震の被害から復興中の村を主人公の映画監督が訪れると、村の人たちが即席のアンテナを立ててワールドカップ中継を見ていたことだ。今回地震に遭った村の人たちは、ワールドカップを見ていただけるか？ ワールドカップの最中に起こる世の出来事は、当事者以外にはまるで夢幻のように受け流されていく。私自身も、少しそんな状態にある。1978年のアルゼンチン・ワールドカップ時のエピソードは、他人事ではない。あのワールドカップは、当時、反政府活動をする学生らを秘密裏に「処分」するなど、激しい人権弾圧を加えていた軍事政権が、内外の批判をそらすため無理やり誘致したものだった。その軍事政権に対し、娘や息子を拉致された親たちは抗議のデモ行進を連日続けていたのだが、夫は家に帰るやワールドカップを見てアルゼンチン代表の快進撃に我を忘れて興奮し、妻はワールドカップとそれに心を奪われている夫とにやりきれない憎しみを覚えた、という。

そして、このワールドカップでの活躍によりナショナリズムが異様に高揚している韓国では、北朝鮮船と韓国船との間で銃撃戦が起こり、韓国側兵士4人が死亡した。ナショナリズムとは

一体感であり、それを熱望する心である。その一体感がどこに我と彼とのラインを引くのか、何だか不安である。

3位決定戦が終わって、へたり込む韓国選手を、トルコのフォワード、ハカン・シュキュル Hakan Sukurは引っ張って立ち上がらせ、暑苦しく肩を組み、両チーム入り混じって観客席への挨拶に向かわせた。格別に心温まる光景だとは思わないが、韓国の太極旗を振って回るトルコの選手を見ながら、他国で生きることに敏感でしたたかな人たちなのかもしれない、と思った。スタメン選手の大半は、ドイツで生まれ育ったトルコ人移民2世たちだ。トルコのフットボールスタイルも、ヨーロッパで勝ち抜くための個々の強さに加え、さまざまな技術戦術の折衷として柔軟にできあがっているように感じた。対戦相手次第でレベルも内容も変えてくるこのチームは、生き残ることに長けているのではないか。

2002年6月30日（日曜） 曇り

ブラジルの魔術を見るような決勝だった。特にあの2点目は、伝説となるだろう。クレベルソンCLEBERSONが右から中央に送ったパスを、リバウドRIVALDOがスルー、さらに左にいたロナウドRonaldoが受けて、ゴール右隅ギリギリを突く、糸を引くようなシュート。今大会わずか1失点のカーンOliver KAHNから2点を連取したロナウドは、やはり怪物fenomenoだった。

これで今大会は面目を保った。ロナウドのスーパーゴールを8個も見ることができた大会として記憶されるだろう。私が1986年にワールドカップを熱中して見るようになってから得点王はいつも6点、しかも伏兵で大会後はさして大活躍しない選手が取るが多かったから、本物の天才による8点という数字にはまがまがしささえ感じる。ロナウドのゴールはどれも二の句を告げなくなるような信じられないものばかりだった。

カーンはいいキーパーだったかもしれないが、きょうはマルコスMarcosのほうがよりいいキーパーだった。今大会は、フィールドプレーヤーの超美技が少なかったのに対し、キーパーのスーパーセーブがやたらと目立った大会でもある。活躍したキーパーの名前が6人も7人も浮かんで来て、私にとってKahnはその1人でしかない。ディフェンスの裏にスペースが多く、スピードの速い現代フットボールでは、キーパーの機動力、反射力、気力が優れていないとチームが機能しきれないのではないか。

今後のワールドカップでも、このブラジルみたいな型破りなチームはもう出てこないだろう。私はアルゼンチンに深く肩入れしていたので、アメリカ大会やフランス大会ほどにはブラジルにはのめり込んでいなかったが、最初からハマっていたとしたら、これほど痛快なチームもないと想像する。たぶん、ブラジル人にとっては、ペレのころの優勝に匹敵するほど価値の高い優勝ではないか。

★穰治 2022年

主審が腕時計に目をやり、右腕を高く上げ、すでに口にくわえていたホイッスルを三度、長く鳴らす。

深紅のユニフォームに包まれたわれらが浦和レッズの選手たちが、割れるピニャータ（くす玉）piñataのように全身を弾けさせる。ぼくの心臓もピニャータのように破裂する。まわりにいる人たちと、誰彼かまわず抱き合って飛び跳ね、歓喜を爆発させる。

もう死んでもいい。ここで人生が終わってもいい。これ以上の幸せなんて、存在しないんだから。このために、ここマラカナンまではるばるとやって来たのだ。仕事を辞め、貯金を全部はたいて、人生をかけて応援しに来たのだ。何しろ、われら浦和レッズが、クラブ・ワールドカップで初優勝できるかもしれないから。そしてそれは実現した！

日本のクラブチームが世界を制覇するのは、もちろん初めてだ。それがわれらがレッズであることの誇らしさと来たら！ リオは天国だった。レッズが世界制覇し、ぼくたちサポーターが喜びのあまり心臓麻痺を起こして昇天してもいい土地なのだから、天国に決まってる。

赤いサポーター軍団はリオの街に繰り出し、飲み、歌い、踊りまくった。もちろん、カズとヒデもいる。一緒に混ざった街の人たちが、「おまえら、いいぞ、浦和レッズを俺は認める」と言った。ぼくの胸は誇りではちきれそうになった。だって、ブラジル人はぼくの人生の師匠なんだから。

そう、あれから20年も経ち、今は2022年、ぼくは45歳を超えた。

あのとき出逢った友人たちは、今でもかけがえのない仲間だ。

イム・ヨンウは会社で通名を使い始め、3年後に辞めて韓流ブームに乗って、韓国雑貨を輸入する小さな商事会社を起こした。ほどなくしてぼくもそこに加わった。

キチはプロのフットサル選手として成功し、日本国籍も取得して日本代表にも選ばれ、引退後はフットサルチームの監督をして、今は日本代表監督を務めている。

典子さんは経済的問題から結局メキシコには行かず、陸を一人、Ricardoの実家に送って、陸はメキシコの中学に通った。高校まで出たところで、陸は日本に戻り、日本の大学に入る。卒業後は大手の自動車会社に入社、メキシコに赴任して今でも暮らしている。典子さんは依然として通訳ガイドの仕事の続け、リッキーは中堅の私立大学の教授だ。リアムはタブリンに帰った。一度、ぼくとヨンウで訪ねたら、本場のエールをたっぷり奢ってくれた。

いまだに、みんなで年に最低一回は会ってフットサルをし、その後でアイリッシュ・パブで乾杯する。「O'Gorman's」はつぶれてしまったので、別の「Keano」という店で。その店のオーナーが、ぼくだった。でも商事会社を離れて暇そうにしていたヨンウに譲り渡して、マラカナンに来たというわけだ。

正直なところ、ぼくたちが生きる環境は、20年前より厳しい。国外に出るのさえ、政府の厳しい許可をもらうのが大変だった。そのためには賄賂も使った。隣の国とはいつ戦争になってもおかしくない状態で、陸の子どもは日本に戻れば徴兵に取られる。だから戻らない。ヨンウが商事会社を手放したのも、さまざまな妨害に、手放さざるをえなくなったからだ。下手したら、俺たちはゲットーに囲い込まれるよ、とよく言っている。だったらもう、ブラジルかアイルランドに行っちゃおうよ、とぼくは言う。そうだな、と冗談のように笑うが、ぼくもヨンウも本気だ。

明日は、サンパウロに移動してジェルミーニョと会う。ぼくも20年前のジェルミーニョと同じく、すべてを投げ打ってブラジルに来たよ、と言うのだ。そのときに、本当にここで住むことができるかどうか、相談してみる。そして、ここでまた、あのフットサルをするのだ。あのフットサルという場は、いつだってどこにだって、現れる。ぼくたちの魂が集えば、そこがあのフットサルの場だ。そういう磁場こそが、フットボールなのだ。

ぼくはフットボールとともにあり続ける。生きていても死んでいても。